立野遺跡　―すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書―

２０１５年１月　公益財団法人　和歌山県文化財センター

立　野　遺　跡

―すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書―

２０１５年１月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

序

すさみ町は西牟婁郡に位置し、東は串本町と古座川町、西と北は白浜町と境をなしています。南は太平洋に臨み、古来より風光明媚な地として知られています。また、古より大辺路街道は熊野詣の旅人で賑わいました。

すさみ町での発掘調査は、平成22年度（2010年）の近畿自動車道紀勢線建設事業に伴う調査において、弥生時代の川跡から多量の木製品や石器、土器類が出土したことで話題になりました。木製品には容器や農具、工具などといった多種多様なものがあり、これらの中には製品や製作途中の未製品のものもありました。また、石器にも木製品製作時の加工に使用されたと考えられる磨製石斧や削器も出土しました。このことから、木製品や石器等の製作工房跡が近隣に存在し、同時に水田耕作をしていた村の存在を垣間見ることのできる貴重な資料を得ることができました。

今回の調査はその隣接地を、すさみ町公共施設移転に先立ち発掘調査を実施しました。調査地は谷間の低い場所を調査し、弥生時代から古代にかけての河道（川）が調査地全域に及んでいたことや、微高地には人為的に掘られた土坑や溝を検出しました。既往の調査と合わせて、昔の立野地域周辺の全貌が見え始めました。

ここに発掘調査の成果をまとめ、報告書を刊行いたします。本書の報告内容が古の郷土の姿を知る上での一資料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご指導、ご教示いただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成26年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長　工　楽　善　通

例　　言

1．本書は、和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見に所在する立野遺跡の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、すさみ町公共施設移転事業に伴うもので、平成 25 年度に契約をし、平成 26 年度に調査を実施し、調査終了後、報告書作成をおこなった。

3．発掘調査並びに出土遺物整理業務は、「すさみ町公共施設移転事業に伴う立野遺跡発掘調査等業務」として、すさみ町の委託を受け和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山文化財センターが（以下、「県文化財センター」という。）実施した。

4．調査組織は以下の通りである。

	25 年度	26 年度
事務局長	里森　修	嶋田文紀
埋蔵文化財課長	井石好裕	井石好裕
発掘調査業務担当		佐伯和也・渋谷高秀・小林充貴
出土遺物整理業務		佐伯和也

5．本書の執筆・編集は佐伯がおこなった。

6．発掘調査及び出土遺物整理業務で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は県文化財センターが、出土遺物は報告書作成後和歌山県教育委員会に移管して保管している。

凡　　例

1．発掘調査並びに出土遺物整理業務は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』に準拠した。

2．調査および本書で使用した座標値は、平面直角座標（世界測地系）第Ⅵ系を使用した。図に使用した北方位は座標北、標高は東京湾標準潮位（Ｔ．Ｐ＋）である。

3．発掘調査の土色及び出土遺物整理の土器の土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」（2010 年版）に準じ、土質は調査担当者の判断で付した。

4．本書で使用した調査区名、遺構番号は発掘調査時のものを踏襲している。遺構番号は１からの通し番号で、欠番も存在する。

5．遺物図面の縮尺は、土器は 1/4、石器は 1/2 及び 1/3 で掲載した。遺物写真については任意の大きさで掲載した。

6．調査で使用した調査コードは、14 － 41・002（2014 年－すさみ町・立野遺跡）で、記録資料はこのコードを用いて管理している。

本文目次

序・例言・凡例
第Ⅰ章　環境…… 1
第１節　地理的環境…… 1
第２節　歴史的環境…… 2
第Ⅱ章　経緯と経過…… 3
第１節　調査に至る経緯と経過…… 3
第２節　既往の調査…… 4
第３節　発掘調査…… 4
第４節　出土遺物整理業務…… 5
第５節　現地公開…… 6
第Ⅲ章　調査の方法…… 6
第１節　調査記録…… 6
第２節　調査区の地区割り…… 7
第Ⅳ章　調査の成果…… 8
第１節　基本層位…… 8
第２節　遺構…… 9
第３節　遺物…… 19
第Ⅴ章　まとめ…… 24

挿図目次

図１　位置図…… 1
図２　周辺の遺跡…… 2
図３　調査区位置図…… 3
図４　地区割図…… 7
図５　14 区西壁基本層位 …… 8
図６　15 区上面遺構 …… 10
図７　15 区上面・下面、
　　14 区遺構断面土層図 …… 11
図８　14 区・15 区下面遺構 …… 13･14
図９　14 区遺構断面土層図１ …… 16
図10　14 区遺構断面土層図２ …… 17
図11　掘立柱建物・遺構 101 実測図…… 18
図12　包含層出土遺物実測図…… 20
図13　遺構出土遺物実測図…… 20
図14　包含層及び遺構出土の打製石器
　　実測図…… 21
図15　包含層及び遺構出土の礫石器
　　実測図…… 22

写真目次

写真１上ミ山古墳石室……２
写真２弥生時代前期自然流路木製品出土状況…４
写真３調査風景……５
写真４遺物実測……５
写真５現地公開（遺物説明）……６
写真６ラジコンヘリによる空中写真撮影……６
写真７出土遺物……６

表目次

表１　土器遺物観察表……23
表２　石器遺物観察表……24

図版目次

図版１
１．15 区上面(写真手前)全景(北上空から)
２．15 区上面(写真中央)全景(南上空から)
３．15 区上面全景(上空から)
図版２
１．15 区上面全景(北から)
２．15 区上面遺構１(北から)
３．15 区上面遺構１断割り状況(南西から)
４．15 区上面遺構２(北から)
５．15 区上面遺構２断割り状況(南西から)
６．15 区上面遺構５～８(北から)
７．15 区上面遺構３・４・９～17(北東から)
図版３
１．15 区遺構３土層堆積状況(南から)
２．15 区遺構４土層堆積状況(南から)
３．15 区遺構５土層堆積状況(南から)
４．15 区遺構６土層堆積状況(南から)
５．15 区遺構７土層堆積状況(南から)
６．15 区遺構８土層堆積状況(南から)
７．14 区南側・15 区全景(南東上空から)
図版４
１．14 区南側・15 区全景(北から)
２．14 区・15 区西側全景(北から)
３．14 区・15 区東側全景(北西上空から)
図版５
１．14 区遺構 18 トレンチ A 土層堆積状況(東から)
２．14 区遺構 18 トレンチ B 土層堆積状況(南から)
３．14 区遺構 18 トレンチ C 土層堆積状況(北西から)
図版６
１．14 区遺構 19 土層堆積状況(南東から)
２．15 区遺構 21 完掘状況(北から)
３．15 区遺構 22 土層堆積状況(南東から)
４．15 区遺構 23 完掘状況(東から)
５．14 区遺構 24 セクション１土層堆積状況(南東から)
６．14 区遺構 24 セクション２土層堆積状況(南東から)
７．14 区遺構 24 セクション３土層堆積状況(東から)
図版７
１．14 区遺構 25 土層堆積状況(東から)

２．14 区遺構 26 土層堆積状況(南から)
３．14 区遺構 42 土層堆積状況(南東から)
４．14 区遺構 43 セクション 1 土層堆積状況(東から)
５．14 区遺構 43 セクション 4 土層堆積状況(南西から)
６．14 区遺構 44 セクション 1 土層堆積状況(南から)
７．14 区遺構 44 セクション 2 土層堆積状況(北から)
８．14 区遺構 44 セクション 4 土層堆積状況(南から)
９．14 区遺構 44 セクション 3 土層堆積状況(北から)
10．14 区遺構 44 セクション 5 土層堆積状況(南から)

図版８
１．14 区遺構 45 土層堆積状況(南から)
２．14 区遺構 46 セクション 1 土層堆積状況(西から)
３．14 区遺構 46 セクション 2 土層堆積状況(西から)
４．14 区遺構 46 セクション 3 土層堆積状況(西から)
５．14 区遺構 46 セクション 4 土層堆積状況(東から)
６．14 区遺構 47 土層堆積状況(南から)
７．14 区遺構 53 土層堆積状況(南から)
８．14 区遺構 55 土層堆積状況(南から)

図版９
１．14 区遺構 56 土層堆積状況(南から)
２．14 区遺構 57 土層堆積状況(南から)
３．14 区遺構 60 土層堆積状況(東から)
４．14 区遺構 61 土層堆積状況(南から)
５．14 区遺構 62 セクション 2 土層堆積状況(南から)
６．14 区遺構 62 台石出土状況
７．14 区遺構 62 セクション 1 土層堆積状況(南東から)

図版 10
１．14 区遺構 64 土層堆積状況(南から)
２．14 区遺構 65 土層堆積状況(南西から)
３．14 区遺構 76 セクション 1 土層堆積状況(東から)
４．14 区遺構 76 セクション 2 土層堆積状況(北西から)
５．14 区遺構 79 土層堆積状況(南から)
６．14 区遺構 81 土層堆積状況(南西から)
７．14 区遺構 83 セクション 1 土層堆積状況(東から)
８．14 区遺構 83 セクション 2 土層堆積状況(南から)

図版 11
１．14 区遺構 97 土層堆積状況(北から)
２．14 区遺構 100 セクション 1 土層堆積状況(南から)
３．14 区遺構 110 土層堆積状況(北西から)
４．14 区遺構 138 土層堆積状況(南東から)

図版 12
１．14 区北側全景(南上空から)
２．14 区北側全景(上空から)
３．14 区北端(遺構 46・62)(東から)

図版 13
１．14 区遺構 101 遺物出土状況(北西から)
２．14 区遺構 101 遺物出土状況(西から)
３．14 区遺構 101 石鏃出土状況(俯瞰)
４．14 区遺構 101 土層堆積状況(南から)
５．14 区遺構 101 内出土遺物(写真 1 のアップ)
６．14 区遺構 101 土層堆積状況(西から)

図版 14
１．14 区建物 1 全景(南から)
２．14 区建物 1 全景(北から)
３．14 区建物 1(遺構 120)断割状況(北から)
４．14 区建物 1(遺構 121)断割状況(南から)
５．14 区建物 1(遺構 123)断割状況(南から)

図版 15

１．14 区西壁土層堆積状況(北から)

２．14 区東壁土層堆積状況(北から)

３．14 区北壁(遺構 120 付近)
土層堆積状況(南から)

４．14 区北壁(現有水路から東)
土層堆積状況(南西から)

図版 16

１．14 区下層確認 A トレンチ
(現有水路より西側)(南西から)

２．14 区下層確認 A トレンチ
(現有水路より東側)(南東から)

３．14 区下層確認トレンチ２(北西から)

図版 17・18

出土遺物(土器)

図版 19・20

出土遺物(石器)

第Ⅰ章　環　境

第１節　地理的環境

すさみ町は和歌山県西牟婁郡に属し、西と北は同郡白浜町、東は東牟婁郡串本町と古座川町に接し、南は太平洋に面し、枯木灘海岸の一角を占めている。枯木灘は黒潮に洗われ、その自然が織りなす隆起沈降海岸地形の美しさは、昔より風光明媚な地として人々に親しまれ、白浜町から串本町までの約70㎞に及んでおり熊野枯木灘海岸県立自然公園に指定されている。町の範囲は東西 19.25 ㎞、南北 15,5 ㎞で、面積は174.71k ㎡を有する。

図１　位置図

町域の北部にあっては善司ノ森山、重善岳などの山並みが連なり、獅子目峠を分水嶺として、周参見川が山間部を縫うように南西流し、佐本川が東流して古座川町で古座川に合流する。気候は温暖で海岸部には国指定天然記念物の「稲積島暖流性植物群落」や「江須崎暖地性植物群落」があり、亜熱帯植物も生育している。

交通は JR 紀勢線が海岸部を通り、周参見、見老津、江住の各駅があり、線路と沿うように国道 42 号線が延びる。また、主要地方道として県道 38 号すさみ古座線、別名「古座街道」が周参見川と佐本川に沿うように通っている。

町の産業は漁業、林業、農業の第１次産業が基幹産業となっている。平地が少なく、町域の90％以上が山林で占められているため内陸部の地区では杉、檜などの林業が伝統的に行われてきたが、昭和 40 年代まであった多くの製材所も木材不況の煽りを受け衰退している。

農業では米作をはじめ、レタスなどの野菜栽培、ストックなどの花卉栽培、梅栽培が平野部で行われている。戦前に江住村でレタス栽培が始められ、戦中に一時中断していたが戦後の昭和26 年頃から量産と販路拡大を図り、レタス産地としての地位を築きあげ昭和 57 年にピークを迎えたが、その後価格の低迷や後継者不足もあって生産量は下降の一途を辿っている。

漁業はハワイ伝来といわれる鰹などを対象魚とした「ケンケン漁」やスルメイカ漁、イセエビなどを対象とした刺網漁なども盛んである。

観光では、町内にある試験場で誕生したイノシシとブタの交配種「イノブタ」などにより毎年イノブタレースが開催され、町おこしの一役を担っている。また、マリンスポーツも盛んで、フィッシングやダイビングなどが楽しめるスポットが多い。人口は 2014 年９月現在で 4,288 人となっており、年々減少し過疎化が深刻な問題となっている。

立野遺跡が所在する周参見はすさみ町の中心部で周参見湾に注ぐ周参見川と太間川の下流域に位置する。湾の入口に浮かぶ稲積島は防波堤の役目を果たし、天然の良港をつくっている。遺跡は海岸線から約 2.5 ㎞遡った低地部に位置する。この辺りは古い時期の周参見川が穿入蛇行した後に形成された平野部にあたり、周辺には比較的まとまった平野部が広がり、標高の高い山際を宅地として利用している。なお、水田は昭和 30 年代に圃場整備が行われ、整然とした区画で配置されている。

第２節　歴史的環境（図１）

すさみ町では原始・古代として認知されている遺跡は少ない。縄文・弥生時代では縄文土器片が周参見駅の東側で発見され、町南部の里の遺跡で石斧が出土しているが遺跡の詳細は不明である。この他、立野遺跡で弥生前期の土器類、木製品、石器が、周参見湾の奥まったところの丘陵部に位置する小泊遺跡で弥生土器片が見つかっている。

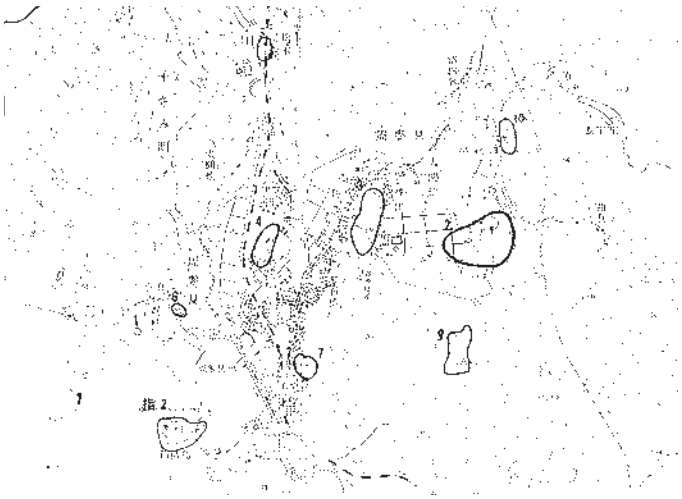
古墳時代の遺跡では上ミ山古墳（写真１）が有名である。上ミ山古墳は昭和 45 年に造成工事の際に発見された不時発見の後期古墳である。規模は、径 40m、高さ４ｍの円墳で、葺石が葺かれていたことが確認されており、紀南地方では数少ない古墳の一つである。内部主体は、築造時は３箇所あったことが確認されており、工事で２箇所が破壊されている。石室は２枚の石障で３区画に仕切られ、羨道は右片袖式となる。遺物は須恵器や武器・工具・玉類が出土しており、これらの遺物から６世紀前半の築造と考えられている。

立野遺跡からは須恵器、土師器が出土しており、小泊遺跡からも須恵器や製塩土器が出土していることから海岸沿いでは塩造りが行われていたことが窺われる。

古代の遺跡は明らかにはなっていないが、律令制下では牟婁郡に帰属し、「和名抄」にある牟婁郡５郷のうち、「三前郷（みさきのごう）」に属していたと考えられる。

中世（鎌倉時代前期）には荘園として「周参見荘」の名が文献に現れ、鎌倉時代後期には那智山領であったことが窺える。戦国期には周参見氏が日高川下流域を掌握する安宅氏とともに熊野水軍の一翼を担った。周参見氏は周参見川下流域に本拠をおき、神田城・周参見城・中山城・藤原城などの山城を築き、敵の侵入を阻んでいる。これらの城は保存状態が良好で、土塁や堀切などが構築され、防御性の高いものである。狭い地域内に多くの城が存在する状況は、同じ水軍領主である安宅氏の城砦群と酷似している。

周参見港は入り口を塞ぐように浮かぶ稲積島によって荒波が遮られ、古くから海上交通の風待港や避難港として重要視されてきた。また世界遺産にも指定されている大辺路仏坂を下った古道は周参見の町中を通り海岸線を南下し、周参見と古座を結ぶ「古座街道」も交差しているところから、周参見は海路と陸路の要衝の地となっていた。このため近世には紀南支配の中心地として紀州徳川家の口熊野奉行所が置かれ、東は太田川（那智勝浦町）から西は瀬戸鉛山（白浜町）に至る 157 ヵ村、石高 19,373 石の地域を管轄する地方政治の中心地として栄えた。



1 上ミ山古墳　**2 立野遺跡**　3 神田城跡　4 中山城跡　6 小泊遺跡
7 周参見城跡　9 藤原城跡　10 立野城跡　11 駒爪城跡
和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図から転載

図２　周辺の遺跡

写真１　上ミ山古墳石室

第Ⅱ章　　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

すさみ町により、すさみ町公共施設移転事業が計画され、その事業予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である立野遺跡の範囲に該当することから、すさみ町から平成 25 年 10 月 28 日付け文書により文化財保護法第 94 条の通知が提出された。これを受け、確認調査が必要である旨を和歌山県教育委員会が平成 25 年 10 月 31 日付け文書で通知した。

その後、立野遺跡にすさみ町公共施設移転事業が及ぶ範囲について、平成 25 年 11 月 7 日付け文書ですさみ町より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成 25 年 11 月 8 日に和歌山県教育委員会が受諾し、生涯学習局文化遺産課ですさみ町公共施設移転事業に伴う立野遺跡確認調査として実施した。

生涯学習局文化遺産課の確認調査の実施は、平成 25 年 11 月 12 日から 12 月 17 日にかけて行なわれた。なお、隣接地で計画されている近畿自動車道紀勢線建設に伴う立野遺跡確認調査と併せて実施したため、調査成果を相互に判断して記録保存が必要とされる範囲について調査対象地としている。

なお、今回発掘調査を実施した面積は、14 区と 15 区を合わせ 6,079 ㎡であった。

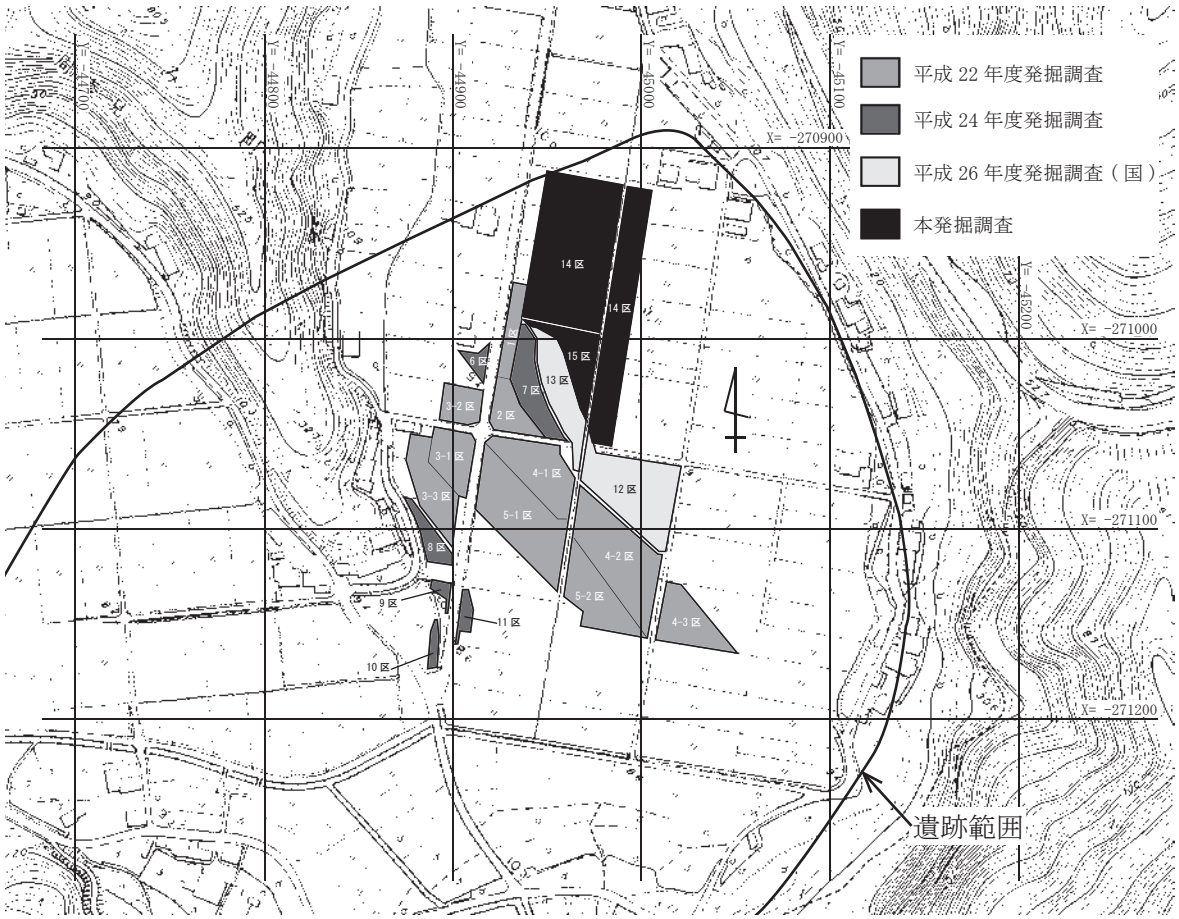


図３　調査区位置図（S=1/4000）

第２節　既往の調査（図３）

１．平成 22 年度の調査（注１）

調査地は、本調査地の南南西約 30 ～ 150m の地点を 8,526 ㎡の調査を実施した。検出遺構には弥生時代前期・中期、古墳時代、奈良時代の自然流路や弥生時代末から古墳時代初頭、平安時代末から鎌倉時代にかけての水田区画がある。遺物では弥生時代前期から中世にかけての各時代の遺物が出土した。しかしながら、この調査では竪穴住居等の遺構は検出されなかったが、検出された遺構や出土遺物によって、この付近では弥生時代前期から中世・近世まで集落が連綿と営まれていたことは否めない。中でも、西側の山裾で検出された自然流路（遺構 302）からは木材が折り重なり出土し（写真２）、それらの間からは木製品・石器・土器が多量に出土した。特に木製品については容器･農具･工具･狩猟具等と多種多様で、製品や製作途中のものがあった。このような状況から、縄文時代から弥生時代の過渡期における農耕社会成立期の木製品の生産を考える上で貴重な資料を得たものといえる。

写真２　弥生時代前期自然流路木製品出土状況

２．平成 24 年度の調査（注２）

調査地は平成 22 年度の調査区に隣接し、現有町道の北側と南側に沿う形で行われた。調査面積は 1,249 ㎡であった。検出した遺構には隣接地（平成 22 年度調査）で検出した弥生時代、古墳時代、奈良時代の自然流路の続きなどがあり、土器類や木製品などが出土し、調査範囲の北東側と南側にまだまだ遺構が延びることを確認している。

第３節　発掘調査（写真３）

本調査はすさみ町公共施設移転事業に伴う立野遺跡発掘調査等業務として実施した。調査は工事請負方式で実施し、発掘調査工事として有限会社和深建設に発注し、航空写真測量を株式会社共和に委託した。

実質の現地調査は、平成 26 年５月２日から機械掘削を開始し、平成 26 年９月 16 日に埋戻し完了写真を撮影し現地を引き上げた。次に、この間の主だった作業を実施順に記す。

調査区の現況は水田で、14 区、15 区の２区に分け調査した。遺構検出面は 14 区が１面、15 区が２面である。なお、調査区の呼称の基となるものは、近畿自動車道紀勢線建設に伴う第１次調査（１区～５区）、第２次調査（12 区・13 区）及びすさみ西インター建設に伴う調査（６区～11 区）において作業工程上付した地区割りを踏襲するものである。

機械掘削は、隣接地ですでに調査を先行していた上述の第２次調査の 13 区と整合性を図るため 15 区の南側から開始した。15 区の機械掘削終了後、包含層の人力掘削を行い、遺構検出及び遺構掘削を実施した。その後、記録図面作成・写真撮影終了後、ラジコンヘリによる第１回航空写真測量を請負業者により実施した。続いて 15 区の下面調査に入り、包含層を地山面まで掘り下げた。なお、14 区の機械掘削は 15 区の下面遺構検出時の包含層掘削と併行して行い、南側か

ら開始した。従って、第2回目の航空写真測量は14区の南側一部と15区の下面を同時に実施した。第2回目航空写真終了後、遺構検出状況も精査して良好な状態であるため、現地公開を7月19日（土）に実施した。現地公開は主にすさみ町住民を対象としたもので、現地調査の説明と第1次調査で出土した遺物展示を行い、これらの遺物説明を行った。

写真3　調査風景

次に、14区南側の機械掘削終了箇所の包含層掘削を行いながら、14区北側の機械掘削を実施し、地山面まで包含層掘削を実施し遺構検出を行った。今まで、14区南側及び15区で検出した遺構は旧河道跡が殆どを占めていたが、14区の北側にゆくに連れて検出面の標高が高くなり、弥生時代の溝や土坑状遺構などの明瞭な遺構が検出され始めた。これらの遺構掘削、個別遺構図面作成・写真撮影を終了後、第3回航空測量対象範囲を精査し測量を実施した。調査の最終作業として、調査区の東西方向に下層確認トレンチを機械により掘削し、土層堆積状況の図面作成及び写真撮影を実施した。その後、埋戻しを行い調査を完了した。

第4節　出土遺物整理業務（写真4）

整理作業は、発掘調査で出土した遺物収納コンテナで9箱分の遺物（土器類・石器類）について実施した。

写真4　遺物実測

検出遺構はその種類にかかわらず、通し番号で遺構番号を付した。また、調査終了後、遺構番号順に調査区・地区・種別・規模・出土遺物の有無などを記した一覧表を作成し、遺構台帳として管理している。出土遺物については、調査時の遺物登録番号を踏襲し、破片に遺跡コードと登録番号を注記し、接合作業、補強・復元作業の後、遺物登録台帳を作成して管理している。

調査記録は写真撮影と図面作成を行った。写真撮影については４×５判（モノクロ・リバーサル）、６×７判（モノクロ・リバーサル）、35㎜（リバーサル）のフィルムを使用した。４×５判フィルムについては、主として全景写真撮影に使用した。1200万画素相当のデジタルカメラを補助的に使用し、デジタル画像データには内容を記入して保存している。また、航空写真測量時に委託業務として撮影した調査地の遠景・近景・俯瞰写真については納入成果品の一部として保管している。

発掘調査時の記録図面は、航空写真測量によるＳ＝１/50の遺構平面図と、調査員によるＳ＝１/10・１/20の遺構実測図（遺構断面図・遺構平面図）、Ｓ＝１/20の調査区壁面土層図、Ｓ＝１/100の遺構配置図を作成した。

第５節　現地公開（写真５）

写真５　現地公開（遺物説明）

調査成果は、周辺住民を主たる対象とし、現地公開という形で実施した。現地公開案内のビラは立野区長を通して周辺住民へ配布して頂き、その周知にご尽力を賜った。

現地公開は平成 26 年７月 19 日（土）に別事業である近畿自動車道関連の第２次調査と合同で実施し、本遺跡の調査内容および出土遺物の説明等を行った。なお、本調査並びに別事業からの出土遺物が少量であったため、平成 22 年度調査（近畿自動車道紀勢線事業に伴う立野遺跡発掘調査）の旧河道（遺構 302）から出土した土器、木器、石器を県教育委員会から借用して展示し、これらについての説明を行った。当日は地元の人を中心として約 30 名の参加者があった。

第Ⅲ章　　調査の方法

第１節　調査記録

当遺跡の調査は、当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』(2006. ４）に準拠して実施した。

発掘調査で使用した調査コードは、14 － 41・02 - 2（2014 年度－すさみ町・立野遺跡）である。但し、同年に同遺跡で別事業としての発掘調査（12・13 区）があり、本調査の資料全般を管理するにあたり紛らわしくなるため末尾に - 2 を付した。出土遺物、記録資料（図面、写真等）はこの調査コードを用いて管理している。

調査時の出土遺物については、遺物カードに調査コード、登録ナンバー、地区名、遺構ナンバー、層位、取上げ日を記入して登録ナンバー毎にナイロン製ネットに収納した。出土遺物は遺物収納コンテナに９箱（写真７）であった。

記録資料の平面実測図は、遺構配置図をＳ＝ 1/100、調査区壁面土層図をＳ＝ 1/20、各検出遺構の平面図・断面図をＳ＝ 1/20 で実測している。また、航空写真測量を専門業者に委託してＳ

写真６　ラジコンヘリによる空中写真撮影

写真７　出土遺物

＝1/50 の縮尺で平面実測図を作成している。

同じく記録資料として写真撮影作業も併せて行った。フィルムは４×５判モノクロ・リバーサル、６×７判モノクロ・リバーサル、35mm リバーサルを使用し、補足的にデジタルカメラも使用した。撮影は調査員が行った。

調査区の全景写真は、写真撮影用足場を組んで調査員が撮影し、航空写真測量委託業務の一環として、上空からラジコンヘリコプター（写真６）による遺跡遠景、調査地近景、遺構の俯瞰などのカットを撮影した。なお、航空写真測量は調査の工程上３回に分けて行った。これについての成果品は原図、出力図、データファイル、密着写真等で納入されている。

第２節　調査区の地区割り（図４）

遺構実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割りの基準線は、平面直角座標系（世界測地系）第Ⅳ系の座標軸を使用し、立野遺跡を網羅する区切りのいい北東隅の数値を地区割りの基点（X =-270.00km、Y =-45.00km）とした。なお、この基点の座標は平成 22 年度に実施された近畿自動車道紀勢線事業に伴う立野遺跡発掘調査に準拠した。

この基点から、西方向および南方向に各々 100 m毎に区切った区画を１単位とした大区画を設定し、基点から西方向へ大文字アルファベットでＡ～Ｊと、南方向へアラビア数字で１～ 10 と表記した。さらに大区画の中で４m 四方の区画を１単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へアルファベット小文字でａ～ｙと、南方向へアラビア数字で１～ 25 と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、４m四方の小区画で行い、大区画と小区画を組み合わせて表記した。（例：Ｄ－４，ｇ・13）

方位は座標北を使用し、標高は東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）からのプラス値を使用した。

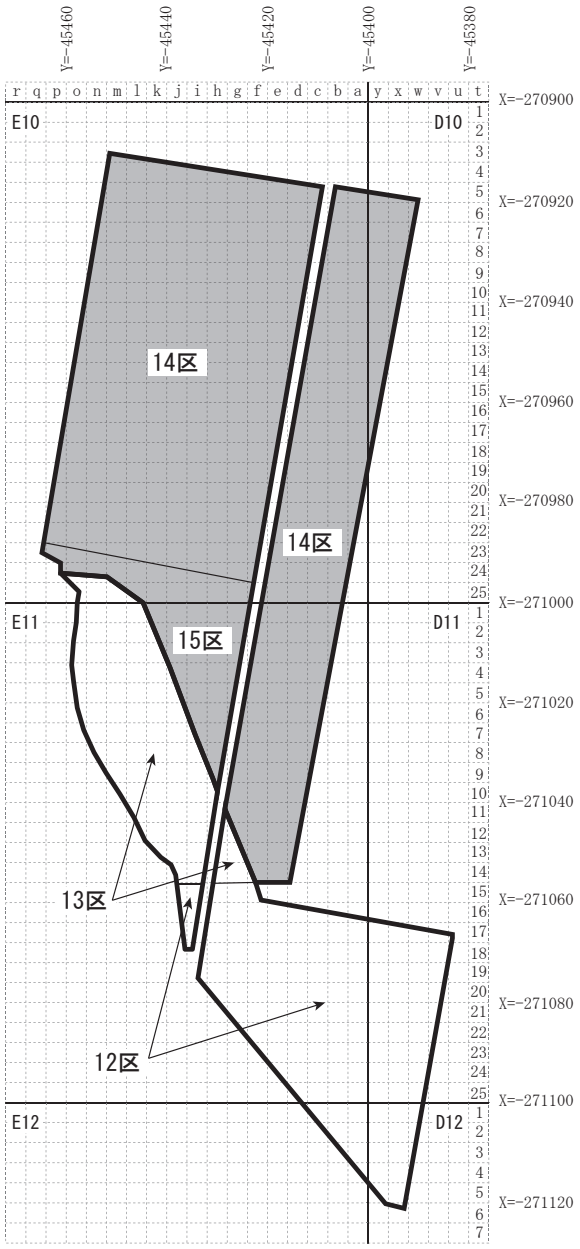


図４　地区割図（4m 区画）（S=1/1500）

第Ⅳ章　　調査の成果

第１節　基本層位（図５）

掘削は、基本的に和歌山県教育委員会文化遺産課の試掘データに基づき、機械掘削と人力掘削を行った。ただ､調査区 14 区の北東隅は地山が高くなり､包含層の存在が認められなかったため、遺構検出面上の 10 ㎝までを遺構面保護層として残し、人力で遺構検出面まで掘り下げた。遺構面保護層掘削後に遺構を検出し、遺構を掘削した。

調査地の基本層序は、１～８層に分層した。上層から、第１層は現在の水田耕作土である。第２層は灰黄褐色シルト層を基調とする江戸期から近現代までの水田耕作土である。第３層は調査区の殆どの範囲で確認できた黒褐色シルトを基調とした層で、上下の第２層及び第４層と明確に区分でき、調査地の鍵層となる層である。中世後半から近世に帰属すると考えられる。第４層は灰黄色シルトを基調とした層で、既往の調査から中世前半頃の堆積層である。第５層は部分的に堆積が認められないが、黒褐色シルトを基調とする古墳時代から古代にかけての堆積層である。第６層は灰オリーブ色シルトを基調とし弥生時代中期から古墳時代の遺物を含んでいる。第７層は部分的にしか認められないが、灰色シルトを基調とし弥生時代の遺物を包含する。第８層は地山で、無遺物層である。調査地の南側ではオリーブ灰シルト、北側は礫層、黄色系シルトとなる。なお、地山は調査地の北方向にゆくに連れて高くなり、北東及び北西方向はより高くなる。この状況は、調査開始前の地形と同様で、現況の水田は北から南に檀上に下がった状況にあった。また、東側と西側は民家が建ち並び、水に浸ることのない高処となっている。

以上の基本土層で、第３層から第６層は水平堆積を呈しており、この状況から水田に伴う土層であると考えられる。

遺構検出は、15 区は第４層上面及び第８層（地山）上面の２面で、14 区は第８層（地山）上面で行った。

本調査において旧河道を検出した。旧河道の範囲は調査区のほぼ全域に及ぶため、正確な範囲および、その下層の土層堆積状況を確認するために、調査終了直前にトレンチを東西方向に設定し、断割ったところ遺構検出面から下層は、砂層、礫層の互層となり無遺物層であった。現在のように水田化される以前は旧河道が縦横無尽に流れていたことが窺えられる。なお断割りは、崩落の危険を伴うため深さ約 1.0 m弱で断念した（図版 16)。

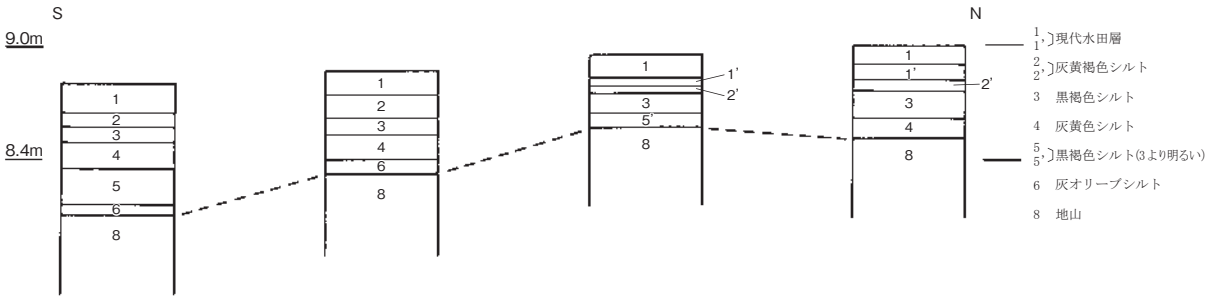


図５　14 区西壁基本層位（S=1/40）

第２節　遺構（図６・７）

調査を実施した 15 区、14 区の順で記述する。15 区の検出面は２面で、上面の遺構は第４層上面で、下面は８層（地山）上面で検出した。14 区は地山上で検出した。

【15 区上面検出遺構】（図６・７、図版１～３）この地区では、土坑状遺構や落込み状遺構、ピット状遺構などを検出した。

（遺構１）（図７、図版２）調査区の東側で検出した落込み状遺構である。東側は現有の水路で攪乱されている。規模は南北長 30m、東西長 8.7m を測る。残存の深さは 0.05 ～ 0.1m で、埋土は木屑片等の有機物を含む 7.5Y5/2（灰オリーブ）シルトの単層である。遺物は微量の弥生土器片や土師質土器片、砥石片が出土した。

（遺構２）（図７、図版２）遺構１の北側に近接して検出した。遺構１と同様の落込み状遺構である。規模は東西長 8.9m 以上、南北長 8.7m 以上を測り、残存の深さは 0.06 ～ 0.16m を測る。埋土は遺構１と同様である。ここからの遺物は皆無であった。

（遺構３）（図７、図版３） 調査区の北西隅で検出した南西から北東方向に流れていたと考えられる溝状遺構である。この辺りは高処となり、地山上で検出した。規模は長さ 3.0m 以上、幅 1.1m を測る。残存の深さは約 0.2m である。埋土は２層に分層でき、上・下層ともに黄灰色シルトである。上層からは弥生土器の破片が２点出土した。

（遺構４）（図７、図版３）遺構３の東に近接して、地山上で検出した土坑状遺構である。規模は南北長３m 以上、東西長 1.7m を測り、残存の深さは 0.06m と浅い。埋土は 7.5Y6/2（灰オリーブ）シルトの単一層である。弥生土器と考えられる細片３片が出土した。

（遺構５～８）（図７、図版２・３）調査区北端で検出した４基の土坑状遺構である。残存の深さも全ての土坑について 0.04 ～ 0.06m と非常に浅い。形状は楕円形（遺構５・７）、不定形（遺構６）、アメーバ－状（遺構８）と様々で、埋土は単一の 5Y5/1（灰）微砂混じりシルトである。何れの土坑状遺構からも出土遺物は皆無であった。

他にはピット状遺構を９基（遺構 9 ー 17）検出した。直径 0.2 ～ 0.4m の円形を呈し、深さも 0.2 ～ 0.4m を測る。何れのピットからも出土遺物は皆無であった。６基のピットは単一層で 5Y5/2（灰オリーブ）微砂混じりシルトで、他の３基については明瞭に２層に分層でき、上層は 5Y5/2（灰オリーブ）微砂混じりシルト、下層は 5Y6/2（灰オリーブ）シルトである。

【15 区下面検出遺構】（図８、図版３・４） 遺構は調査区北西側で検出した。検出した遺構は旧河道（流路）、土坑状遺構３基で、何れの遺構も残存状況は良好でなく、後世の削平を受けたものと考えられる。旧河道については、調査地全体に渡って検出されたため、14 区検出の遺構で記す。

（遺構 21）（図７、図版６） 形状は南北方向に長い楕円形を呈し、規模は東西 1.1m、南北 2.1 ｍを測る。残存の深さは中央の最も深い箇所で 0.06 ｍと非常に浅い。埋土は単一層で 2.5Y6/1（黄灰）シルトである。ここからの出土遺物は皆無である。

（遺構 22）（図７、図版６）遺構 21 の西に隣接して検出した土坑状遺構である。規模は 0.6 × 1.2m の楕円形を呈する土坑状遺構である。残存の深さは中央で 0.04m と非常に浅い。埋土は粘性の強い 5Y6/1（灰）シルトの単一層である。ここからの出土遺物も皆無であった。

（遺構 23）（図７、図版６）遺構 22 の西側で検出した土坑状遺構である。形状は楕円形を呈し、規模は 0.6 × 0.8m を測る。残存の深さは 0.05m と浅い。埋土は、遺構 22 と同様である。出土遺

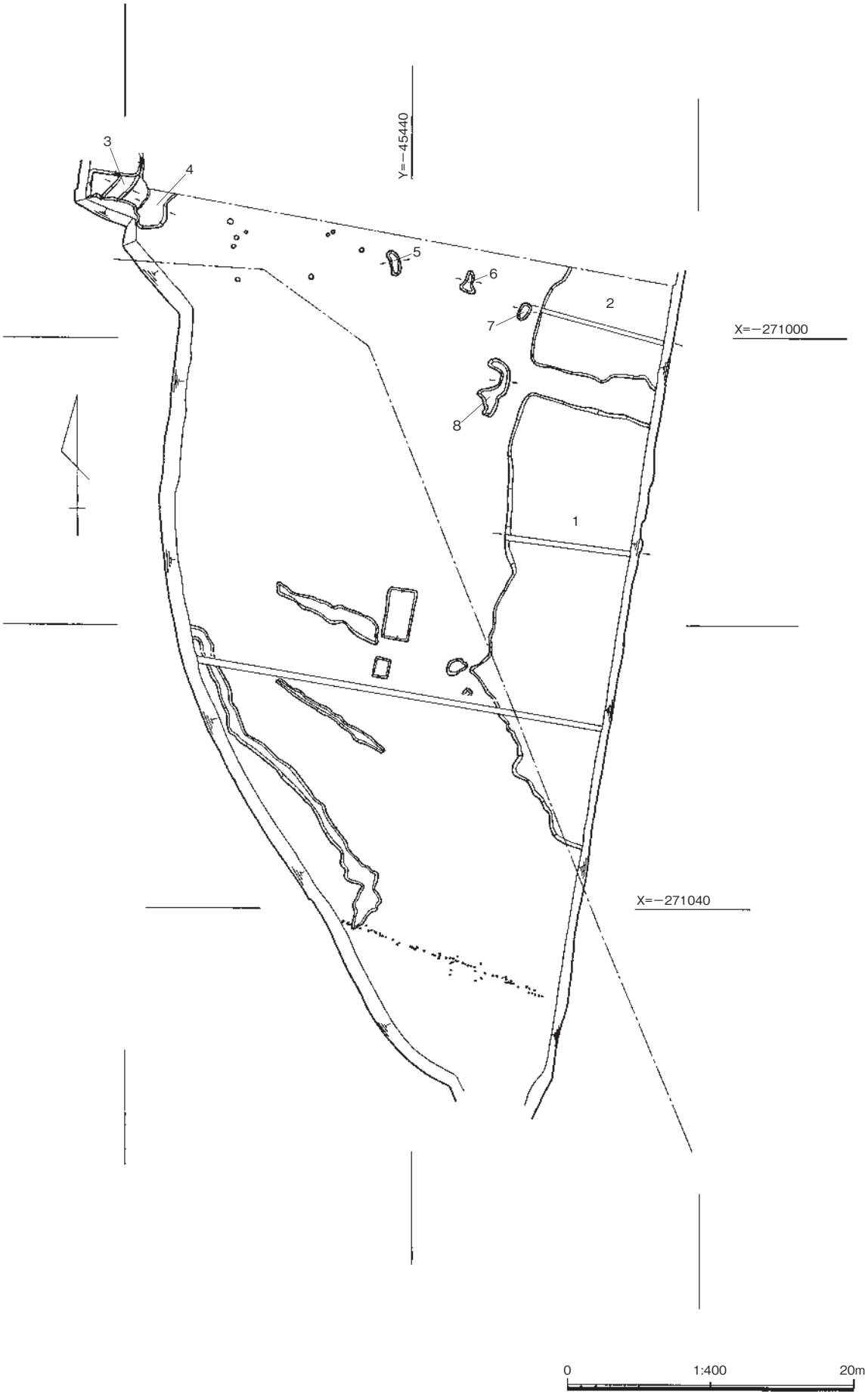


図6　15区上面遺構

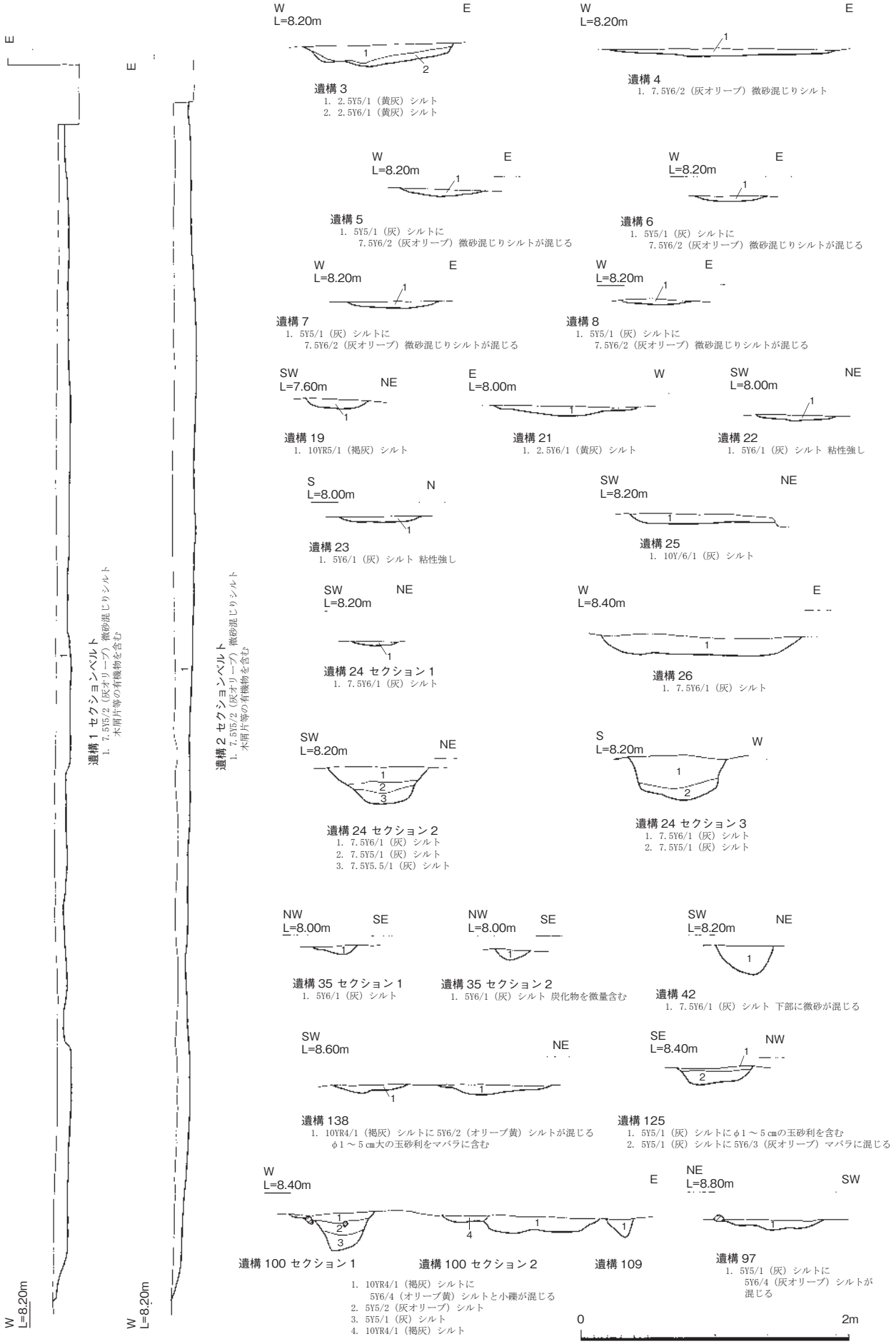


図 7　15 区上面・下面、14 区遺構断面土層図

物は皆無である。

【14 区検出遺構】（図８・９・10・11、図版４・12）調査区の中央東寄りに南北方向の現有の水路が南流している。遺構密度は 15 区でもそうであったが、全体的に希薄である。特に現有水路を跨いで、南側の 12・13 区（近畿自動車道紀勢線調査）で検出された旧河道が本調査区でも検出された。旧河道以外の遺構が検出されたのは当地区の西側寄りである。これらの遺構には土坑状遺構、溝状遺構、掘立柱建物などがある。以下、主だった遺構について南側から順に記述する。

（遺構 19）（図 7、図版６）調査区の南東隅で検出した楕円形状を呈する土坑状遺構である。規模は 0.5 ～ 0.7m を測る。残存の深さは 0.07m と浅い。埋土は 10YR5/1（褐灰）シルトの単一層である。ここからの出土遺物は皆無である。

（遺構 24）（図 7、図版６）調査地の中央西で検出した溝状遺構である。西側の調査区外から東に流れていたと考えられる。検出し得たのは約 22m である。検出幅は 0.5 ～ 0.8m、残存の深さは 0.04 ～ 0.34m を測り、東側で浅くなり消滅する。埋土は灰色系シルトで３層に分層でき、出土遺物は皆無である。

（遺構 25）（図 7、図版７）遺構 24 の南に接して検出した土坑状遺構である。形状は楕円形を呈し、規模は約 3.0 × 4.0m、残存の深さは 0.08m を測る。底から肩にかけ緩く立ち上り、底は平坦である。埋土は灰色シルトの単一層で、ここからの出土遺物は無い。

（遺構 26）（図 7、図版７）遺構 24 の北側で検出した土坑状遺構である。形状は長楕円形を呈し、規模は南北長約 4.0m、東西長約 1.5m を測り、残存の深さは 0.16m を測る。断面形状は舟底状を呈する。埋土は 7.5Y6/1（灰）シルトの単一層である。ここからの出土遺物も皆無であった。

（遺構 35）（図 7）調査区の南端で検出した溝状遺構である。東側は流路と重複しているが、前後関係は判然としない。流路からの派生した溝状の遺構とも考えられる。形状と底の深さから判断して東から南西方向に流れていたと考えられる。検出長は約 13.0m、幅は 0.25 ～ 0.35m、残存の深さは 0.06 ～ 0.08m と浅い。埋土は 5Y6/1（灰）シルトで、微量の炭化物を含む。この遺構からも遺物は皆無である。

（遺構 42）（図 7、図版７）遺構 24 の南側で検出した溝状遺構である。遺構 24 と同様に西側は調査区外に延びている。検出長は 6.5m、幅は 0.3 ～ 0.4m を測る。残存の深さは最も深い中央部で 0.22m を測る。断面の形状はほぼ「U」字形を呈する。埋土は 7.5Y6/1（灰）シルトで、下部に微砂が混じる。出土遺物は皆無である。

（遺構 43）（図９、図版７）調査区の南西隅で検出した土坑状遺構である。形状はアメーバー状を呈する。形状から二つの遺構が重複している可能性があるが、精査を行ってもそのプランは確認できなかった。規模は約 10.0 × 12.0 ｍ、残存の深さは最も深い箇所で 0.15 ｍを測る。底は多少の凹凸は有るものの総じて平らである。埋土は 7.5Y6/1（灰）シルトの単一層で、所々に微差を含む。この遺構からの出土遺物は皆無である。

（遺構 100・109）（図７）調査区のほぼ中央部で検出した溝状遺構である。西側（100）と北側（109）から流れてきた溝が結合し一体となり南に流れる。また、遺構 100 と遺構 109 は旧河道と重複するため北側については検出できていない。旧河道との一部分の重複関係からは旧河道より新しい溝であると判断できる。検出し得た長さは、遺構 100 が約 16m、遺構 109 が 17m である。幅は遺構 100 が 1.4m、遺構 109 は約 0.65m を測る。残存の深さは遺構 100 が 0.27m、遺構 109 が 0.14m

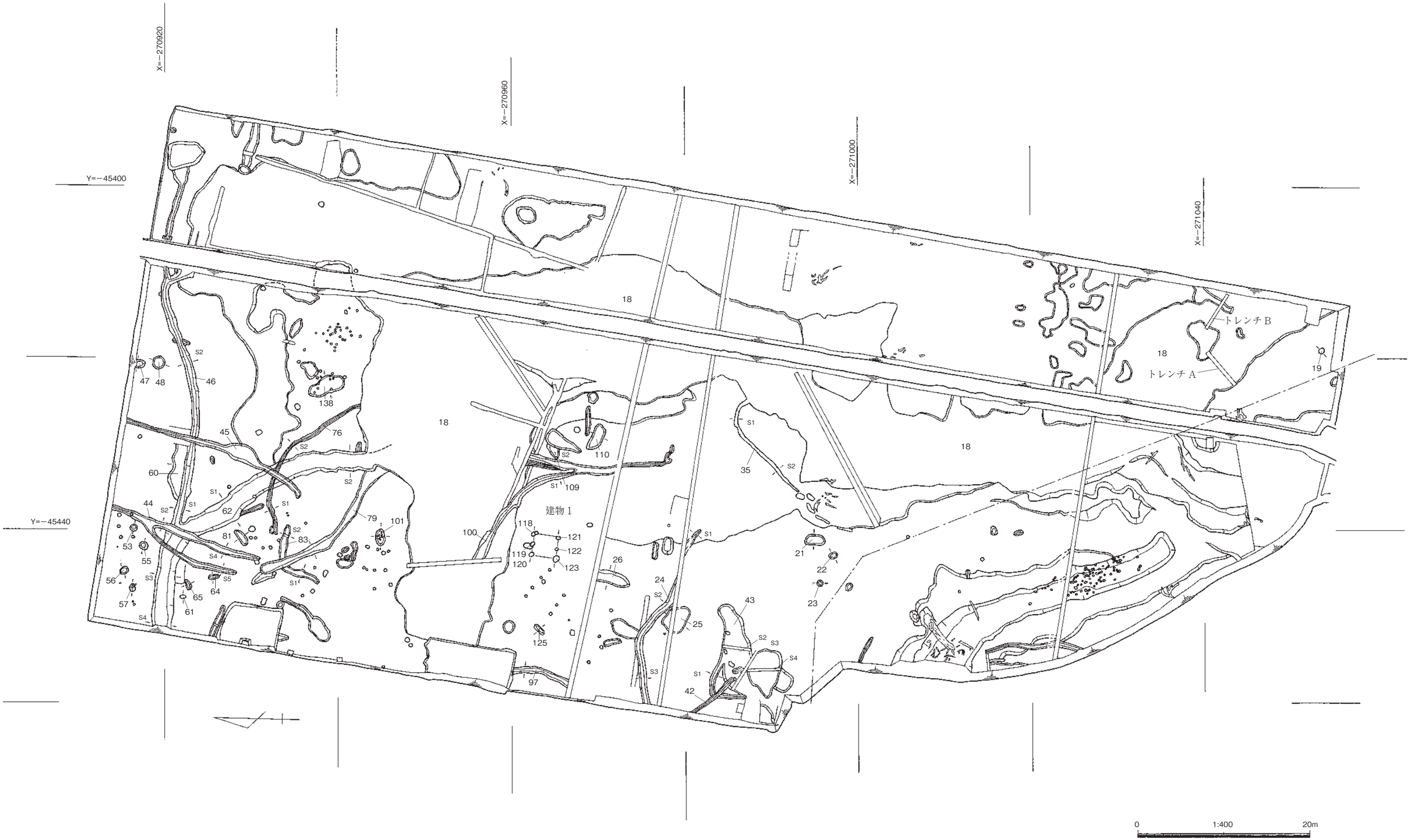


図8　14区・15区下面遺構

を測る。断面形状は遺構 100 がほぼ台形を呈する。遺構 100 の埋土は上層が 10YR4/1（褐灰）シルトで、それから下層は、灰色系のシルトで２層に分層できる。ここからの出土遺物には弥生土器細片の他、台石と考えられる石片が１片ある。

（遺構 97）（図 7､図版 11）調査区中央西端で検出した南北方向の溝で､北側は撹乱され不明となり、約 6.5 ｍを検出した。検出した幅は 0.5 ～ 0.75 ｍ、残存の深さは 0.09 ｍを測る。埋土は灰色系シルトの単一層である。この遺構からは弥生時代後期と考えられる土器の細片が十数片出土した。

（遺構 125）（図 7、図版 11）遺構 97 の東に隣接して検出した土坑状遺構である。形状は長楕円形を呈し、規模は約 0.55 × 1.70 ｍを測る。残存の深さは 0.10 ～ 0.14 ｍを測る。断面形状は舟形を呈し、埋土は灰色系シルトで２層に分層できる。ここからの出土遺物は皆無であった。

（遺構 138）（図 7、図版 11）調査区中央北寄りの微高地上で検出した土坑状遺構である。形状はアメーバー状を呈し、中央は後世の削平によるものか、埋土が無い状況となる。規模は約 1.6 × 4.3 ｍ、残存の深さは 0.08 ｍを測り、埋土は単一層で、褐灰色と黄色系のシルトの混層に割合大きい玉砂利を含む。出土遺物は皆無である。

（遺構 110）（図９、図版 11）遺構 100 の東側で検出した楕円形を呈する土坑状遺構である。規模は 1.3 × 3.4 ｍで、残存の深さは 0.08 ｍを測る。埋土は灰色シルトに黄色系シルトが混ざった単一層である。遺物は弥生土器片が数片出土している。

（遺構 53・55 ～ 57・61・64・65）（図９、図版８～ 10）調査区北西隅で検出した土坑群である。これら７基の土坑状遺構の大きさは 0.4 ～ 1.6 ｍ内に納まるものである。形状は、遺構 57 が円形を呈し、それ以外は楕円形を呈する。残存の深さは、遺構 53・55・57 については約 0.2 ～ 0.3 ｍを測り、他の遺構は 0.04 ～ 0.07 ｍと遺存状態が良好でない。この内、出土遺物が認められたのは遺構 53・55・57 の遺存状態がやや良好な遺構である。これらの遺構については、規模や形状から土坑墓の可能性も考えられる。遺物は、遺構 53 は細片１、遺構 55 も細片１、遺構 57 は細片 5 が出土したが、何れも細片のため時期については断定できない。

（遺構 60）（図９、図版９）遺構 46（溝状遺構）と重複する土坑状遺構である。規模は南北長約 1.7 ｍ以上、東西長約 6.2 ｍを測る。残存の深さは 0.06 ｍと非常に浅い。埋土は灰色シルトに黄色シルトが微量に混ざる単一層である。ここからは弥生時代前期と考えられる破片が 10 片出土した。

（遺構 81）（図９､図版 10）調査区北西隅土坑群のやや南東で検出した。形状は長楕円形を呈し、規模は 0.7 × 2.2 ｍ、残存の深さは 0.05 ｍを測る。埋土は灰色シルトに浅黄色シルトが疎らに混じり、玉砂利も疎らに入る。ここからの出土遺物は皆無である。

（遺構 47・48）（図９、図版８）調査区北端中央で検出した土坑状遺構である。遺構 47 の北側は調査区外にかかり全容は不明である。形状は長楕円形を呈すると思われる。規模は 0.8 × 1.4m 以上で、残存の深さは 0.34m を測る。遺構 48 の形状は楕円形を呈し、規模は 1.0 × 1.4m、残存の深さは 0.12m を測る。埋土は双方ともに少量礫を含む灰色系シルトの単一層である。遺構 48 からは弥生土器と考えられる細片が８片出土している。遺構 47 の出土遺物は皆無である。

（遺構 76・79）（図９、図版 10）調査区の中央西寄りで検出した溝状遺構である。これら２条の溝は北西方向から南東方向に流れていたと考えられる。南東は旧河道（遺構 18）と重複するため全容は明らかでない。旧河道との新旧関係については、調査時に旧河道が埋没してから２条の溝が流れたものと判断した。遺構 76 は 20.8 ｍを検出した。幅は約 0.3 ～ 0.5 ｍ、残存の深さ

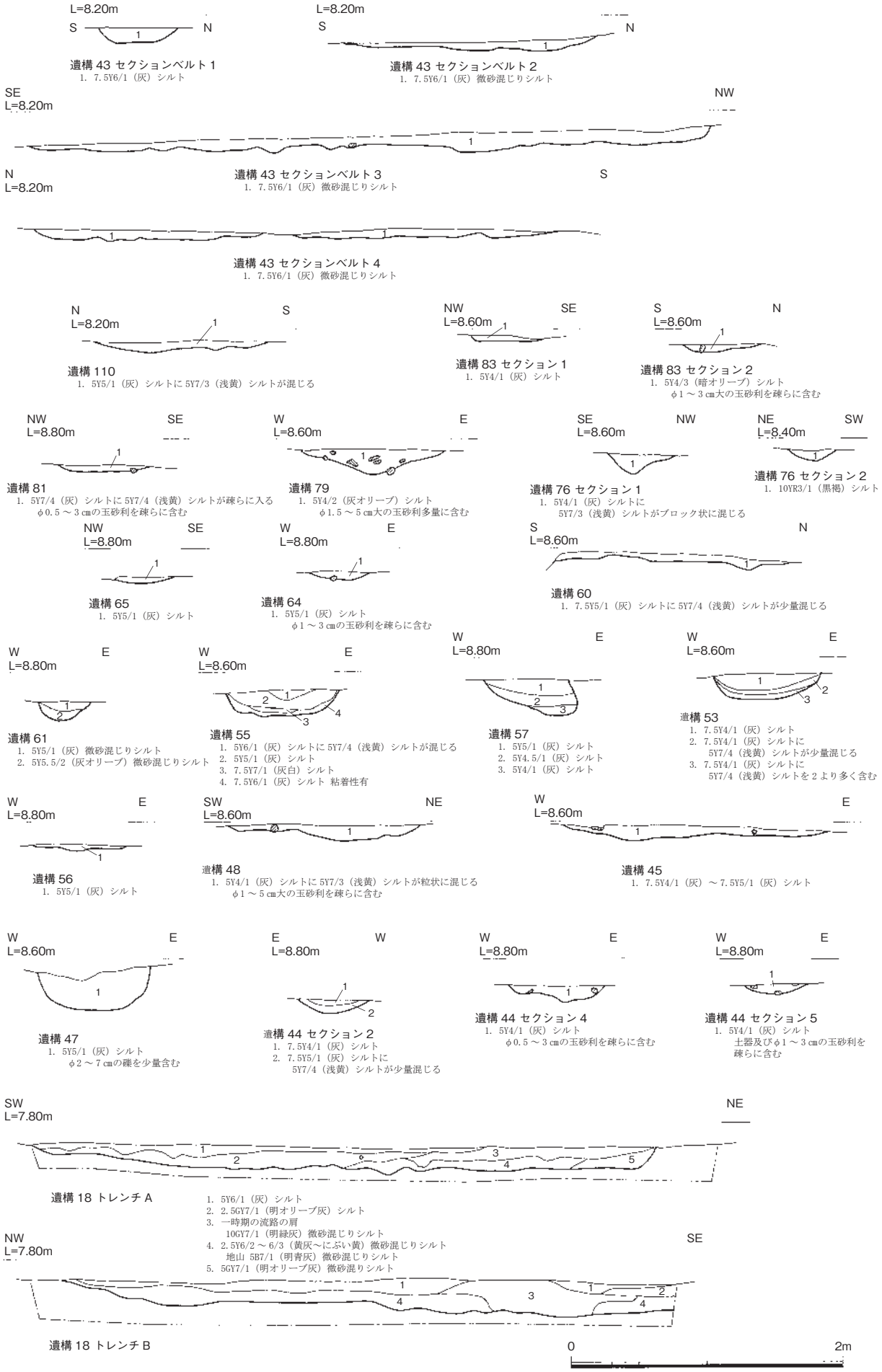


図 9　14 区遺構断面土層図 1

は 0.16 mを測る。埋土は灰色シルトに浅黄色のシルトがブロック状に混ざる単一層である。ここからは弥生土器片と考えられる土器細片 10 片が出土している。遺構 79 は 19.5 mを検出した。幅は 0.7 ～ 1.5 m、残存の深さは約 0.2 mを測る。埋土は灰色系シルトに玉砂利を多量に含む。この溝からは石斧（図 14 の 42）が一点のみ出土したが、他の遺物は皆無であった。

（遺構 83）（図 9 、図版 10）遺構 79 の溝と重複し、遺構 79 より古い。形状は「く」の字状を呈し、先端と末尾は自然消滅している。検出長は 10.4 m、幅は 0.5 ～ 1.0 m、残存の深さは 0.06 mを測る。埋土は灰色系シルトに玉砂利を少量含む。遺物は弥生土器と考えられる破片が 17 片出土した。

（遺構 44・45）（図 9、図版 7 ・ 8）調査区の北西済みで検出した 2 条の溝状遺構である。北側は調査区外のため不明となる。双方の溝は南北方向に延びているが、底の高さから判断すると北に流れていたと考えられる。形状から推量するに、西あるいは南西の微高地から北方向もしくは北東方向に流れていたものと思われる。遺構 44 の検出長は約 18.5 m、幅は 0.5 ～ 0.7 m、残存の深さは 0.1 ～ 0.14 mを測る。埋土は 2 層に分層できる箇所と単一層の箇所があるが、概ね灰色系シルトとなる。ここからの遺物には弥生土器甕底部（図 13 の 25）、弥生土器ミニチュア壺（図 13 の 26）、他に小片、細片を合わせて弥生土器片が約 70 片余り出土している。出土遺物から弥生時代後期の溝と考えられる。遺構 45 は約 22 mを検出した。幅は 0.5 ～ 1.8 m、残存の深さは 0.12m を測る。埋土は灰色系シルトとなる。遺物は弥生土器片 1 、須恵器片 1 が出土している。出土遺物から古墳時代と考えられる。

（遺構 46）（図 10、図版 8 ）調査区の北端で検出された東西方向の溝状遺構である。この遺構の西側 12 mは遺構 62 と重複し、西側の埋土については底の堆積層だけが遺存している。溝底の高さから判断して、西の微高地から東に流れていたと考えられる。検出長は約 56.0 m、幅は 0.8 ～ 3.1 m、残存の深さは 0.33 ～ 0.44 mを測る。断面形状はしっかりとした「V」字あるいは「U」字形を呈し、人為的に掘削された可能性が大である。埋土は西側重複部分の底の堆積層については、N5/0（灰）粘性の強いシルト、東側の上層は黄灰系シルト、下層は灰色シルトとなる。この溝状遺構からは弥生土器壺の底部（図 13 の 27）、他に弥生土器細片、小片が一定量出土し、石製品の剥片（頁岩）も少量出土した。出土遺物から、この溝状遺構の時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

（遺構 62）（図 10、図版 9 ）調査区北西隅で検出した溝状遺構である。調査区外の西方向から北東

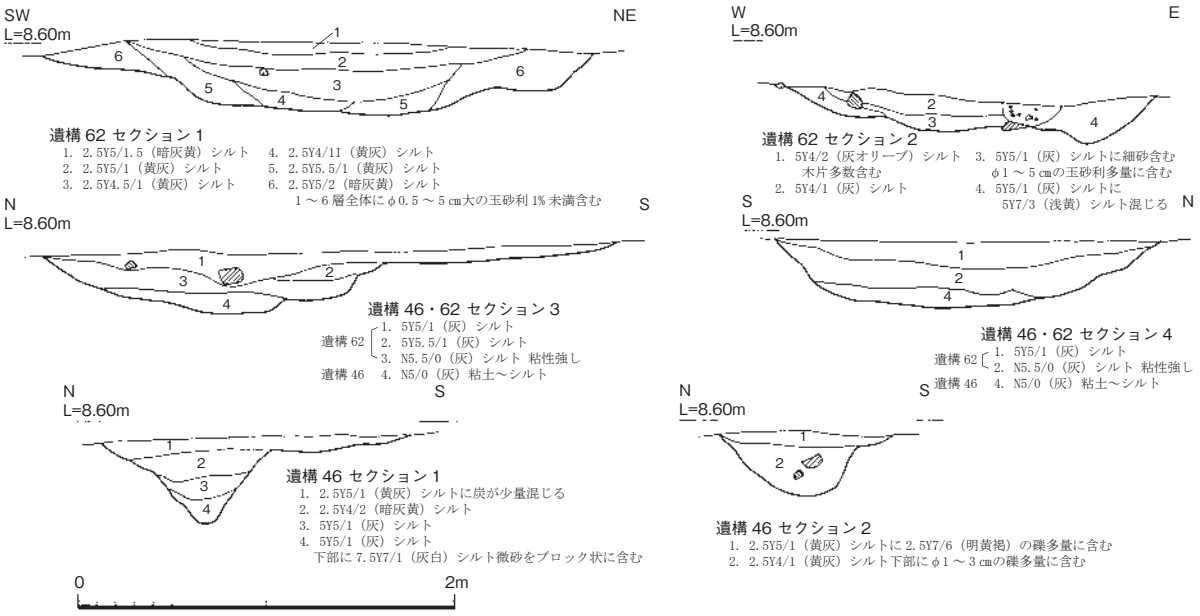


図 10　14 区遺構断面土層図 2

方向に延び、旧河道と重複する。調査時に旧河道上でプラン確認をおこなったが、前後関係は不明である。旧河道に流れ込んで一体となる可能性も考えられる。また、西側は遺構 46 と全く重複し、調査区外の西から遺構 46 の水道を踏襲し流れていたと思われる。検出長は約 36.0 m、幅は約 2.0 ～ 3.0 m、残存の深さは最も深い箇所で 0.36 mを測る。断面形は、底は割合に平らで肩口にかけて緩

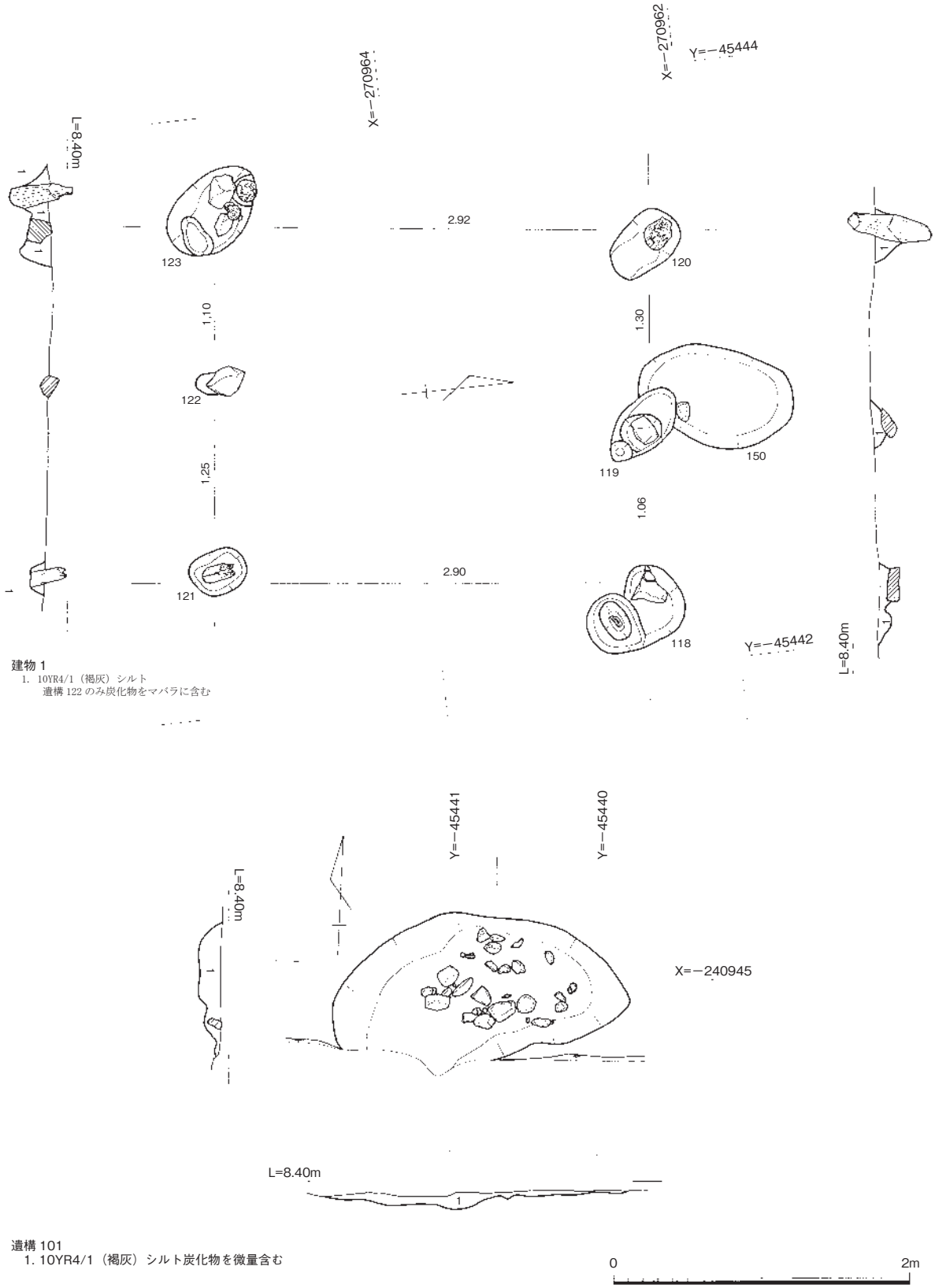


図 11　堀立柱建物・遺構 101 実測図

やかに立ち上がる。埋土は全体に黄灰色系シルトで、レンズ状に堆積し、６層に細分できる。この溝からの遺物には弥生土器甕（図 13 の 19 ～ 21)・高杯（図 13 の 22 ～ 24)、台石（図 15 の 52）があり、他にも一定量の土器の破片が出土している。出土遺物から弥生時代終末期の溝状遺構と考えられる。

（遺構 18）（図９、図版５）全調査区に渡って検出された旧河道（流路）である。この旧河道は、調査地の全域に網の目状に流れていたことが今回の調査により判明した。地形的な観点から、概ね北方向から南方向に流れていたと考えられ、特に調査区の中央部を流れる。調査区の中央部には現有の水路が掘削されており、流れを踏襲している可能性が大である。流路の幅は約 12.0 ～ 20.0 ｍを測り、残存の深さは、トレンチおよび下層確認トレンチを設定した箇所では約 0.15 ～ 0.3 ｍを測る。埋土は５層に分層でき、上層は灰色系のしると、下層は明緑灰～黄灰の微砂混じりシルトとなる。但し、この旧河道の規模は、一時期のものである。また、下層確認トレンチ（図版 16）では砂層（細砂・粗砂）および礫層（径３～ 15 ㎝大）の無遺物堆積層となり、有史以前は、調査地全体が谷状地形となっていたことが窺える。旧河道からは弥生土器片、須恵器片、瓦器椀片（図 13 の 30)、掻器（図 14 の 43・44）などが出土している。

（遺構 101）（図 11、図版 13）調査区北西の微高地上で検出した土坑状遺構である。形状は長楕円形を呈し、主軸を東西とする。規模は東西長約 2.0 ｍ、南北長約 1.0 ｍ、残存の深さは最も深い中央部で 0.16 ｍを測る。断面形は「逆台形」状を呈する。埋土は褐灰色シルトの単一層で、炭化物を微量に含む。底には石鏃（図 14 の 33）が１点、礫石器（図 15 の 45 ～ 50）が６点密集して出土した。また、埋土からは微量の骨片が出土した。他の出土遺物には弥生時代中期の土器細片、小片が約 70 片、石器石材剥片（頁岩）が４点出土した。以上の状況から判断して弥生時代中期の土坑墓と考えられる。

（掘立柱建物）（図 11、図版 14）調査区中央西側で検出した。南北棟の建物である。規模は南北１間（間尺 2.90 ｍ）×東西２間（南側、東から間尺 1.25 ｍ・1.10 ｍ）の小規模な建物である。柱穴の掘形は楕円形を呈し、規模は約 0.4 ～ 0.7 ｍ、残存の深さは 0.08 ～ 0.22 ｍを測る。遺構 120・121・123 の柱穴には太さ 0.12 ～ 0.16 ｍの柱根が遺存していた。遺構 119 と遺構 122 は棟持柱と考えられ、礎石のみ遺存していた。遺構 123 の柱穴掘形から須恵器杯身（図 13 の 29）が出土していることから、７世紀代の建物と考えられる。

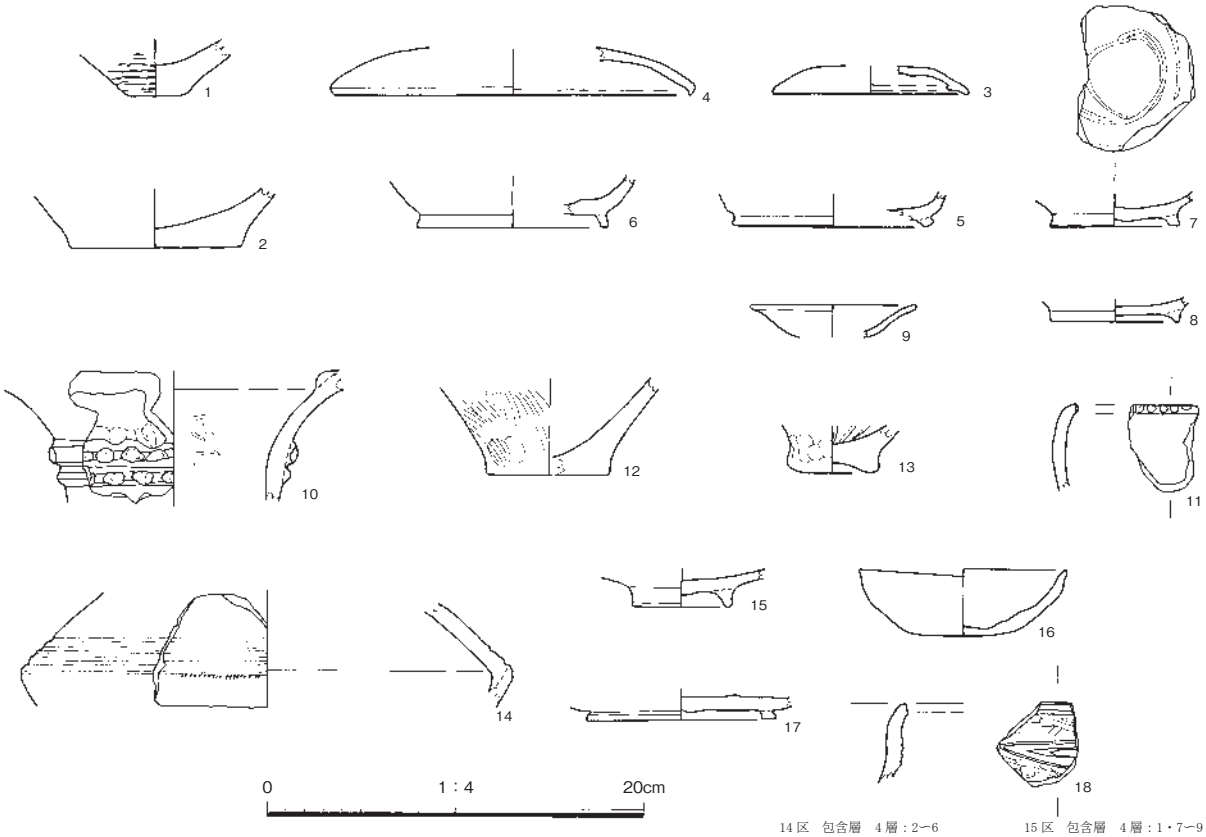
第３節　遺物

今回の調査で出土した遺物は、調査面積の割には少量である。この様な結果となった要因は、調査区全域に旧河道（遺構 18）が巡っていたことにあると考えられる。調査範囲の中央東寄りを現有の水路が北から南に流れており、概ね、この水路を跨いで旧河道を検出した。

この旧河道からの出土量は微量で、遺物の殆どは細片であった。その中でも弥生土器片が最も多く、打製石器（図 14 の 43・44)、あるいは石器剥片も少量ながら出土した。他には古墳時代と考えられる須恵器甕片、古代の土師器片、中世の瓦器椀片（図 13 の 30）なども出土している。

出土遺物の中で、包含層からの出土量が最も多い。時期的には弥生時代中期初頭から近世までの遺物が出土した。図示できるものが少なく、破片ながら図 12 に土器、図 14 の 31 ～ 40 に打製石器、図 15 の 51 に礫石器を掲載した。第３層からの図示できる遺物はなかったが、肥前系磁器や土師器、中国製青磁片が出土している。第４層からは弥生時代中期（２）や終末期（１)、飛

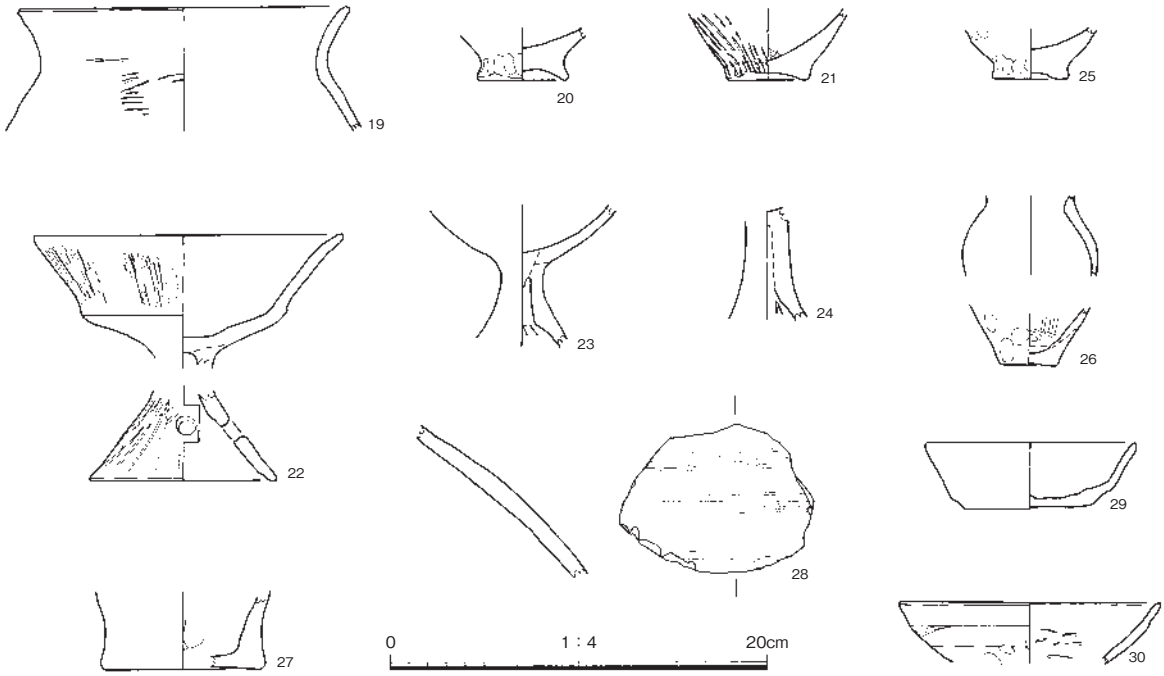
鳥から奈良時代の須恵器（３～６）、古代の黒色土器（７）、土師器椀（８）、中世中国製白磁（９）などの時期幅のある遺物が出土していることから、古代から中世前半の時期に土地改変がなされたことが窺えられる。第５層には弥生土器(10 ～ 14)、古代の須恵器(16･17)、古代の土師器椀(15)がみうけられ、古墳時代から古代の時期が妥当と考えられる。第６層には搬入品と考えられる弥



14 区　包含層　4 層：2ー6
　　包含層　5 層：10ー14、16・17

15 区　包含層　4 層：1・7ー9
　　包含層　5 層：15
　　包含層　6 層：18

図 12　包含層出土遺物実測図



遺構 62：19ー24
遺構 44：25・26
遺構 46：27
遺構 68：28
遺構 123：29
遺構 18：30

図 13　遺構出土遺物実測図

生時代前期の浮線文土器片が出土した。浮線文土器はみなベインターチェンジ建設に伴う調査時にも出土しており和歌山では稀である。(注３)

遺構からの出土遺物については、「遺構」の項で触れたので省略する。打製石器も一定量が出土している。弥生時代前期・中期に帰属するものと思われる。材質は地元産の頁岩である。

図14 包含層及び遺構出土の打製石器実測図

14区　包含層　4層：51　　遺構101：45～50
遺構62：52

図15　包含層及び遺構出土の礫石器実測図

表１　土器遺物観察表

報告書番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存部分	色調	形態・技法	備考
1	弥生土器 甕	15 E11h5	第４層	－	(3.0)	(3.6)	底部	外 2.5Y 浅黄 7/3 内 2.5Y 黒 褐 3/1 ～ 2.5Y にぶい黄 6/3	外面に平行タタキ	反転復元 弥生時代終末期 内面に１～ 3㎜の砂粒多量
2	弥生土器 壺	14 E10j20	第４層	－	(2.8)	(9.2)	底部	外 7.5YR 灰褐 4/2 ～ 5YR 橙 6/6 内 10YR 黄橙 8/6	内外面摩耗のため不明	反転復元 弥生時代中期 胎土に１～ 3㎜の砂粒多量
3	須恵器 杯蓋	14 E10i14	第４層	(10.4)	(1.5)	－	口縁	外 5B 青 灰 6/1 ～ 5B 暗青灰 4/1 内 5B 青灰 6/1	マキアゲ、ミズビキ成形、外面に重焼き痕	反転復元 飛鳥時代（Ⅲ型式２段階） 1㎜の石英多量
4	須恵器 杯蓋	14 E10n17	第４層	(19.0)	(2.5)	－	口縁	5B 青灰 5/1	マキアゲ、ミズビキ成形	反転復元（Ⅳ型式１段階） 1㎜の石英少量
5	須恵器 杯身	14 E10k14	第４層	－	(1.7)	(10.6)	高台	2.5GY オリーブ灰 6/1	マキアゲ、ミズビキ成形	反転復元 飛鳥時代（Ⅲ型式２段階） 1㎜の石英少量
6	須恵器 壺	14 E10m14	第４層	－	(2.5)	(10.0)	高台	N 灰 6/1	マキアゲ、ミズビキ成形	反転復元（Ⅳ型式１段階） 1㎜の石英中量
7	黒色土器 椀	15 E11i3	第４層	－	(1.8)	(6.8)	高台	外 7.5YR にぶい橙 6/4 内 10Y 黒 2/1	高台貼付後ナデ A 類 内面見込に暗文	反転復元 平安時代
8	土師器 椀	15 E11h7	第４層	－	(1.2)	(6.8)	高台	外 5YR 橙 7/8 内 5Y 灰 4/1	高台貼付後ナデ A 類	反転復元 平安時代 １～ 3㎜の砂粒中量
9	白磁 皿	15 E11h6	第４層	(8.8)	(1.7)	－	口縁から体部	2.5GY 灰白 8/1 （釉なし 5Y 灰オリーブ 6/2	口縁端部口禿	反転復元　中国製 鎌倉時代
10	弥生土器 広口壺	14 E10d6	第５層	－	(7.0)	－	頸部	外 2.5Y 浅黄 7/3 内 2.5Y 浅 黄 7/3 ～ N 暗灰 3/0	貼付突帯 （布巻棒圧痕）	反転復元 弥生時代前期 （Ⅰ - ４様式）
11	弥生土器 甕	14 E10d6	第５層	－	(4.6)	－	口縁部	外 2.5Y 灰白 8/2 内 2.5Y 淡黄 8/4	口縁端部にキザミ	１～ 3㎜の砂粒多量 弥生時代中期（Ⅱ様式） （紀伊型甕）
12	弥生土器 甕	14 E10e6	第５層	－	(5.2)	(6.4)	底部	2.5Y 灰黄 6/2	４～５本 /cmハケハケのちユビオサエ	反転復元　弥生時代中期 条痕文系土器　弥生Ⅱ様式併行期 搬入品東海地方？ １～ 3㎜の砂粒多量
13	弥生土器 壺	14 E10n10	第５層	－	(2.5)	(4.9)	底部	外 7.5YR にぶい黄橙 7/4 ～ 10YR にぶい黄橙 7/2 内 10YR 浅黄橙 8/4	内面ヘラ状工具によるナデ	反転復元 弥生時代終末期 1㎜の砂粒多量
14	弥生土器	14 E10g21	第５層	－	(6.0)	－	体部	外 10YR 浅 黄 橙 8/4 ～ 2.5Y にぶい黄 6/3 内 5Y 灰 5/1	沈線５条　最下部の沈線の下にキザミ	反転復元　弥生時代前期から中期 東海系内傾口縁土器か？　１～ 3㎜の砂粒多量
15	土師器 椀	15 E11h6	第５層	－	(2.1)	(5.2)	高台部分	外 10YR にぶい黄橙 6/3 ～ 5Y オリーブ 3/1 内 10YR にぶい黄橙 7/4	高台内側が黒色 高台貼付後ナデ	反転復元　平安時代 高台にゆがみ有り
16	須恵器 杯身	14 E10h18	第５層	11.0 ～ 11.4	3.4	－	口縁～底部	外 7.5Y 灰白 7/2 内 7.5Y 灰白 7/1	マキアゲ、ミズビキ成形、	白鳳時代Ⅲ型式２段階　3㎜の砂粒、1㎜の石英多量　口縁部に歪み
17	須恵器 杯身	14 E10j10	第５層	－	(1.3)	(11.8)	高台	N 灰 6/1	マキアゲ、ミズビキ成形、	奈良時代 Ⅳ型式 反転復元 1㎜の石英多量
18	浮線文土器 鉢？	15 E11h1	第６層	－	(4.2)	－	体部～口縁底部	10YR 黒褐 3/1	眼鏡状の文様 眼鏡状の文様の上下にミガキ	弥生時代前期　中部地方からの搬入品 1mm の雲母多量
19	弥生土器 甕	14 E10m5	遺構 62	(17.6)	(6.5)	－	口縁～頸部	10YR 浅黄橙 8/3	平行タタキ	反転復元 弥生時代終末期 1㎜の砂粒多量 器面摩耗
20	弥生土器 鉢ｏｒ壺	14 E10m5	遺構 62	－	(2.8)	(4.8)	底部	7.5YR 橙 7/6	器面摩耗が著しいため不明	反転復元 弥生時代終末期
21	弥生土器	14 E10m5.6	遺構 62	－	(3.8)	(4.0)	底部	2.5Y 淡黄 8/3	外面右下下がりの平行タタキ	弥生時代終末期 1mm の赤色粒多量
22	弥生土器 高杯	14 E10k6	遺構 62	16.5	杯 (7.0) 脚 (4.7)	(10.0)	口縁 体部 脚部	脚 外 2.5Y 灰 黄 7/2　杯内外 . 脚内 10YR にぶい黄橙 7/3	杯・脚外面ミガキ 2mm/ 本	脚部反転復元 弥生時代終末期 １～ 5㎜の砂粒多量
23	弥生土器 高杯	14 E10m5	遺構 62	－	(7.6)	－	杯部 脚柱部	10YR 浅黄橙 8/4 ～ 2.5Y 黄灰 6/1	器面摩耗・磨滅が著しいため不明	反転復元 弥生時代終末期 １～ 4㎜の砂粒多量
24	弥生土器 高杯	14 E10ℓ 6	遺構 62	－	(5.9)	－	脚柱部	外 10YR 黄橙 8/6 内 5YR 橙 7/6	器面摩耗が著しいため不明	弥生時代終末期 1mm の赤色粒多量
25	弥生土器	14 E10k8	遺構 44	－	(2.7)	(4.0)	底部	外 2.5Y 灰黄 7/2 内 7.5YR 橙 7/6	器面摩耗が著しいため不明	弥生時代終末期 反転復元
26	弥生土器 小形壺	14 E10j5	遺構 44	－	頸部～胴部 (4.3) 底部～胴部 (3.1)	3.0	底部 頸部～体部	外 2.5Y 淡 黄 8/3 ～ N 灰 4/1 内 2.5Y 淡黄 8/3 ～ 10YR 黄橙 8/6	内面底部ヘラ状工具でナデ、後ユビナデ	弥生時代終末期 手捏ね土器 1㎜の赤色粒中量
27	弥生土器 甕	14 E10j6	遺構 46	－	(4.1)	(8.8)	底部	外 10YR 浅 黄 橙 8/4 ～ 5Y 灰白 7/1 内 5Y 灰白 7/1	器面摩耗が著しいため不明	反転復元 弥生時代中期 紀伊形甕の底部か？
28	弥生土器 壺	14 E10ℓ 9	遺構 68	－	(7.9)	－	不明	外 10YR にぶい黄橙 6/3 ～ 2.5Y 黒 2/1 内 2.5Y 暗灰黄 5/2	櫛描直線文 一単位９条 外面黒斑	弥生時代中期 Ⅱ様式 １～ 3㎜の砂粒多量
29	須恵器 杯身	14 E10k17	遺構 123	(11.0)	3.5	－	体部～口縁部 底部	灰 N6/0	マキアゲ、ミズビキ成形	反転復元　飛鳥時代 Ⅲ型式２段階 1㎜の石英中量
30	瓦器 椀	14 E10e19	遺構 18	(13.8)	(3.2)	－	口縁部	暗灰 N3/0	外面粗いミガキ 内面 螺旋状暗文	反転復元

第Ⅴ章　　まとめ

今回の調査地を概観してみると、東と西に山裾が迫る谷状地形で、その中央部は水田で、北から南に向かって低い檀状となっている。また、水田の両外は微高地となり人家が点在する。

調査地は水田部分に当たり、谷状地形の最も低い箇所であったため遺構密度は希薄であった。

調査地の南半部および北半部の東側については明瞭な遺構は検出されず、旧河道（自然流路）が網の目状に北から南西方向に流れていたことを確認した。

最も遺構が集中していたのは調査地の西側で、低地から山裾の微高地部分への変換点に当たると考えられる。北西隅の箇所では、断面形状から推察するに人工的に掘削されたと思われる溝状遺構（遺構 46）を検出した。出土遺物から弥生時代中期と考えられる土器破片が出土している。また、調査地中央部で検出した溝状遺構（遺構 24）も断面形状を観察すると人力により掘削された可能性が高い。以上の状況から、双方ともに西側の微高地上の居住域からの水の始末を考えたものか、あるいは水稲耕作の用水目的として掘削されたものと思われる。土坑墓とした遺構 101 からは骨片と石鏃、礫石器が纏まって出土した。土器片も細片が微量出土したが時期決定には至る資料でない。出土した石器類から判断して弥生時代前期あるいは中期の時期が考えられる。

また、平成 22 年度の調査において、本調査地の南南西約 100m の地点で弥生時代前期の木製品の工房跡と考えられる場所が発見されていることや、今回の調査成果から、調査地の微高地上一帯に人が定住し始めたのは弥生時代前期と思われる。

表 2　石器遺物観察表

報告書番号	種類器種	調査区地区	遺構層位	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重さ g	石材	残存率 %	備考
31	石鏃	14 E10k6	第 5 層	2.9 以上	2.2	0.5	3.51 以上	頁岩	80%	凸基有茎式、先端欠損、側面一部欠損
32	石鏃	14 E11d3	第 6 層	2.9 以上	1.8 以上	0.6	2.56 以上	頁岩	90%	凸基有茎式。先端欠損、茎部先欠損
33	石鏃	14 E10k12	101	3.9	1.9	0.3	2.42	頁岩	100%	凸基有茎式、両面中央自然面利用
34	打製石斧	14 E10h19	第 4 層	8.3	6.8	1.1	53.84 以上	頁岩	90%	片方刃部欠損
35	打製石斧	14 E10j7	第 4 層	9.3	6.6	2.0	131.03	頁岩	100%	基部欠損
36	打製石斧	14 E10c5	第 5 層	6.2 以上	7.3 以上	1.1	54.15 以上	頁岩	50%	基部欠損
37	打製石斧	14 E10d6	第 5 層	8.2	4.8	1.7	67.06 以上	頁岩	100%	刃部先端に使用痕
38	楔形石器	14 E10e6	第 5 層	6.5	9.5	1.5	111.58	頁岩	100%	階段状剥離
39	打製石剣	14 E10c6	第 5 層	6.4 以上	3.2	1.9	51.12 以上	頁岩	不明	残存しているのは基部と思われる。
40	掻器	14 E10c6	側溝	5.0 以上	4.4 以上	0.6	18.45 以上	頁岩	不明	片面自然面利用
41	打製石斧	14 E10ℓ 8.9	67	8.6 以上	5.5	1.3	73.07 以上	頁岩	85%	基部欠損 階段状剥離
42	打製石斧	14 E10k9	79	11.9	4.8	1.4	108.94	頁岩	100%	片面刃部先端使用痕時に欠損か？
43	掻器	14 E10f20	18	8.7	14.5	1.6	282.98 以上	頁岩	95%	片面を自然面利用
44	掻器	15 E11g3	18	5.0	10.0	1.3	62.45	頁岩	100%	刃部先端に調整痕
45	凹石	14 E10k12	101	12.6	14.3	4.4	1240.19	砂岩	100%	片面中央にと側面３辺に敲打痕
46	敲石	14 E10k2	101	9.2	8.3	6.7	582.75	砂岩	100%	頂点およびその外縁に敲打痕
47	敲石	14 E10k12	101	18.8	7.4	6.3	1172.44	砂岩	100%	両先端および１面に敲打痕
48	敲石	14 E10k12	101	12.0	12.0	4.6	898.06 以上	砂岩	100%	両面が敲打痕のためやや窪む
49	敲石	14 E10k12	101	13.8	12.1	4.9	1066.16 以上	砂岩	95%	片面敲打痕
50	台石	14 E10k12	101	17.8 以上	12.6	11.7	3755 以上	砂岩	不明	欠損、片面摩擦痕によりツルツル
51	台石	14 E10j7	第 4 層	27.2 以上	18.8	6.1	4600 以上	砂岩	不明	片面の中央部の殆どに敲打痕
52	台石	14 E10i8	62	35.0 以上	48.6 以上	13.5	26300 以上	砂岩	95%	両面中央部に敲打痕

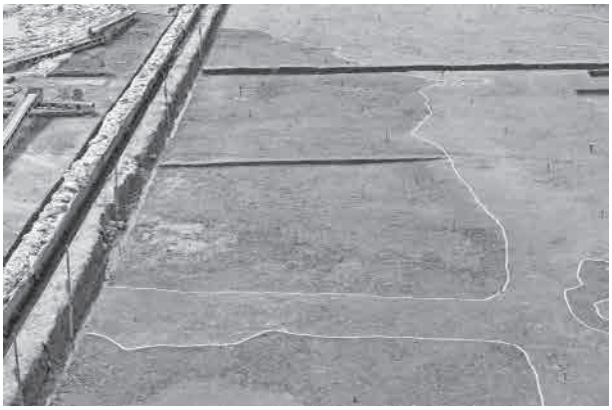
注 1「立野遺跡」―近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書― 2013 年 3 月　公益財団法人 和歌山県文化財センター
注 2「立野遺跡」―近畿自動車道松原那智勝浦線すさみ西インターチェンジ(仮称)事業に伴う発掘調査報告書― 2014 年 3 月　公益財団法人 和歌山県文化財センター
注 3「徳蔵地区遺跡」―近畿自動車道松原那智勝浦線（御坊～南部）建設に伴う発掘調査報告書― 2005 年 3 月　財団法人 和歌山県文化財センター

1．15 区上面（写真手前）
全景（北上空から）

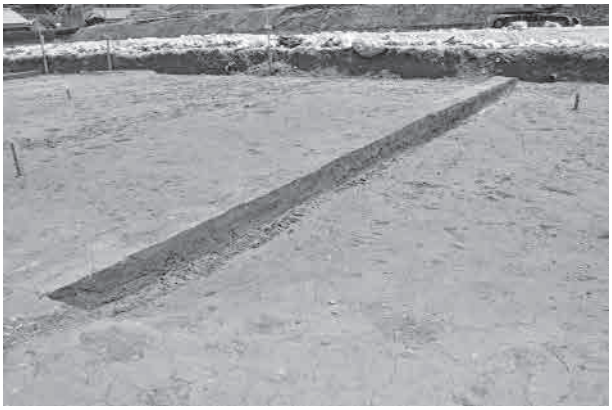
2．15 区上面（写真中央）
全景（南上空から）

3．15 区上面全景
（上空から）

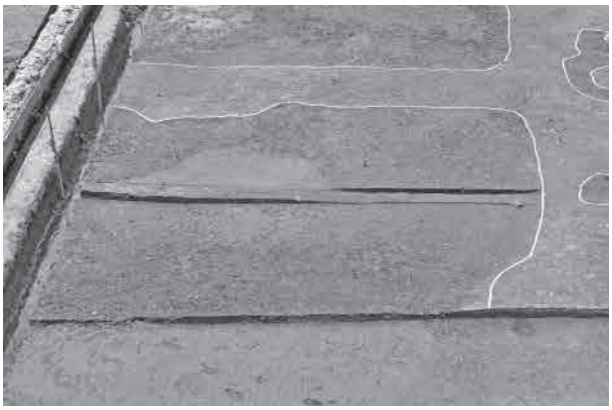
１．15 区上面全景（北から）



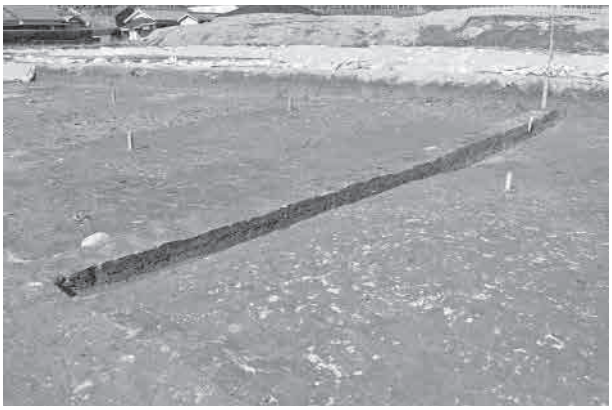
２．15 区上面遺構１（北から）



３．15 区上面遺構１断割り状況（南西から）

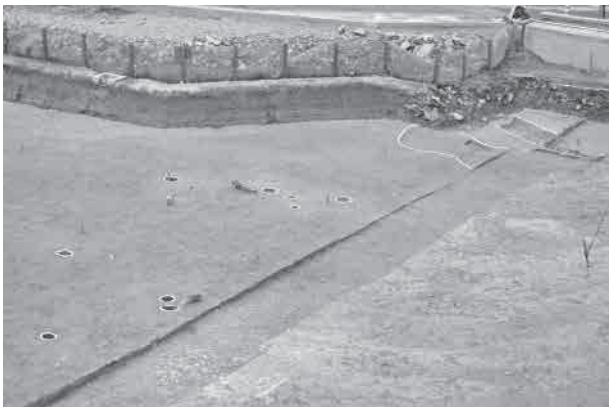


４．15 区上面遺構２（北から）



５．15 区上面遺構２断割り状況（南西から）

６．15 区上面遺構５～８（北から）



７．15 区上面遺構３・４・９～ 17（北東から）

１．15 区遺構３土層堆積状況（南から）

２．15 区遺構４土層堆積状況（南から）

３．15 区遺構５土層堆積状況（南から）

４．15 区遺構６土層堆積状況（南から）

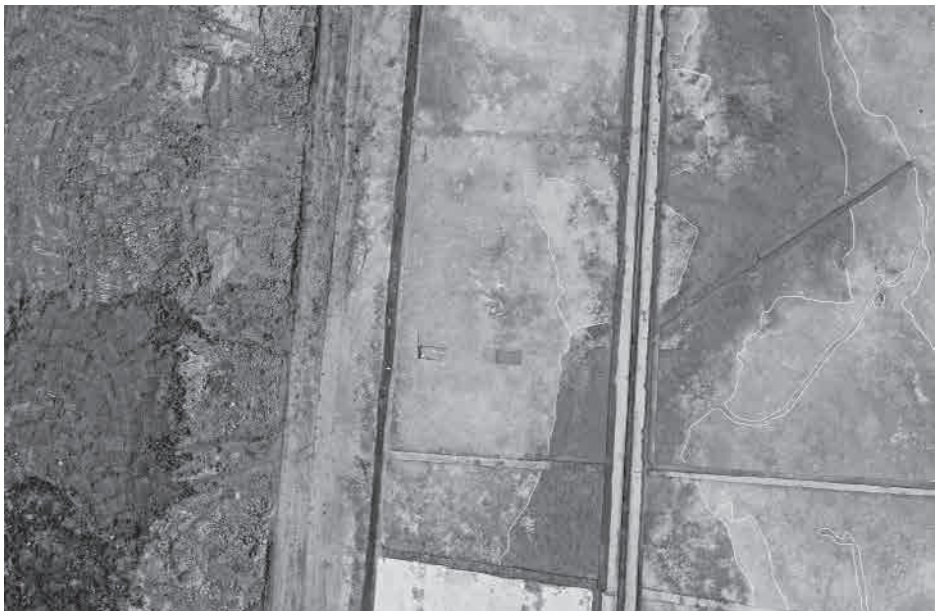
５．15 区遺構７土層堆積状況（南から）

６．15 区遺構８土層堆積状況（南から）

７．14 区南側・15 区全景（南東上空から）

１．14 区南側・15 区全景
（北から）

２．14 区・15 区西側全景
（北から）



３．14 区・15 区東側全景
（北西上空から）

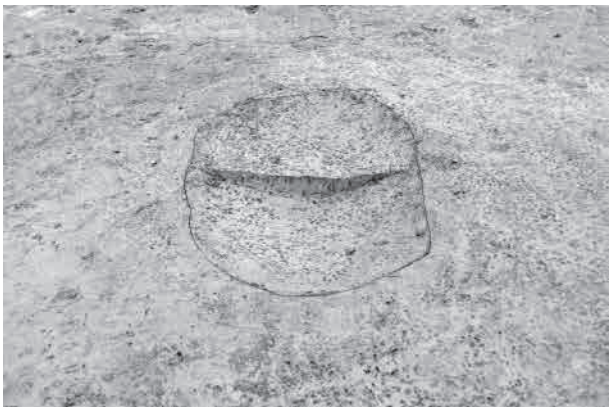
１．14 区遺構 18 トレンチ
Ａ土層堆積状況（東から）

２．14 区遺構 18 トレンチ
Ｂ土層堆積状況（南から）

３．14 区遺構 18 トレンチ
Ｃ土層堆積状況（北西から）

１．14 区遺構 19 土層堆積状況（南東から）

２．15 区遺構 21 完掘状況（北から）



左上
３．15 区遺構 22 土層堆積状況（南東から）
上
４．15 区遺構 23 完掘状況（東から）
左
５．14 区遺構 24 セクション１土層堆積状況（南東から）

６．14 区遺構 24 セクション２土層堆積状況（南東から）

７．14 区遺構 24 セクション３土層堆積状況（東から）

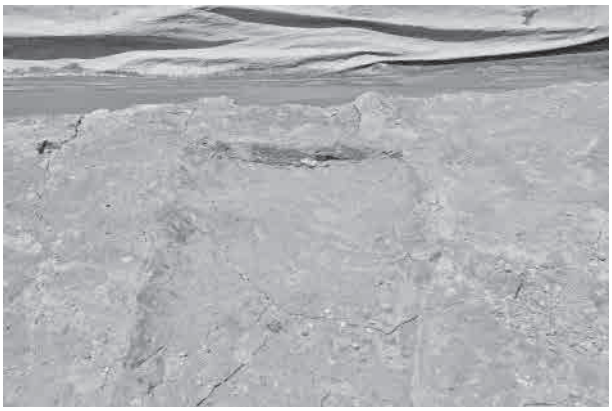
1．14 区遺構 25 土層堆積状況（東から）

2．14 区遺構 26 土層堆積状況（南から）

3．14 区遺構 42 土層堆積状況（南東から）

4．14 区遺構 43 セクション 1 土層堆積状況（東から）

5．14 区遺構 43 セクション 4 土層堆積状況（南西から）



6．14 区遺構 44 セクション 1 土層堆積状況（南から）

7．（上）14 区遺構 44 セクション 2 土層堆積状況（北から）、
8．（下）14 区遺構 44 セクション 4 土層堆積状況（南から）

9．（上）14 区遺構 44 セクション 3 土層堆積状況（北から）、
10．（下）14 区遺構 44 セクション 5 土層堆積状況（南から）

１．14 区遺構 45 土層堆積状況（南から）

２．14 区遺構 46 セクション１土層堆積状況（西から）

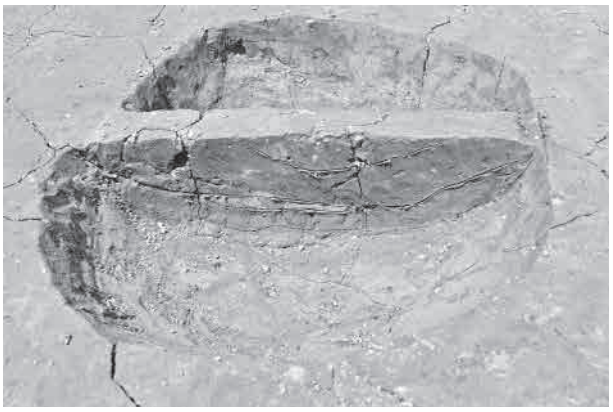
３．14 区遺構 46 セクション２土層堆積状況（西から）

４．14 区遺構 46 セクション３土層堆積状況（西から）

５．14 区遺構 46 セクション４土層堆積状況（東から）

６．14 区遺構 47 土層堆積状況（南から）

７．14 区遺構 53 土層堆積状況（南から）

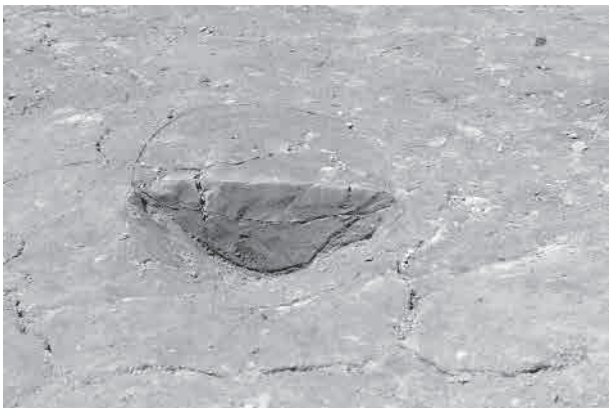


８．14 区遺構 55 土層堆積状況（南から）

１．14 区遺構 56 土層堆積状況（南から）

２．14 区遺構 57 土層堆積状況（南から）

３．14 区遺構 60 土層堆積状況（東から）



４．14 区遺構 61 土層堆積状況（南から）

５．14 区遺構 62 セクション２土層堆積状況（南から）

６．14 区遺構 62 台石出土状況

７．14 区遺構 62 セクション１土層堆積状況（南東から）

1．14 区遺構 64 土層堆積状況（南から）

2．14 区遺構 65 土層堆積状況（南西から）

3．14 区遺構 76 セクション 1 土層堆積状況（東から）

4．14 区遺構 76 セクション 2 土層堆積状況（北西から）

5．14 区遺構 79 土層堆積状況（南から）

6．14 区遺構 81 土層堆積状況（南西から）

7．14 区遺構 83 セクション 1 土層堆積状況（東から）

8．14 区遺構 83 セクション 2 土層堆積状況（南から）

1．14 区遺構 97 土層堆積状況（北から）

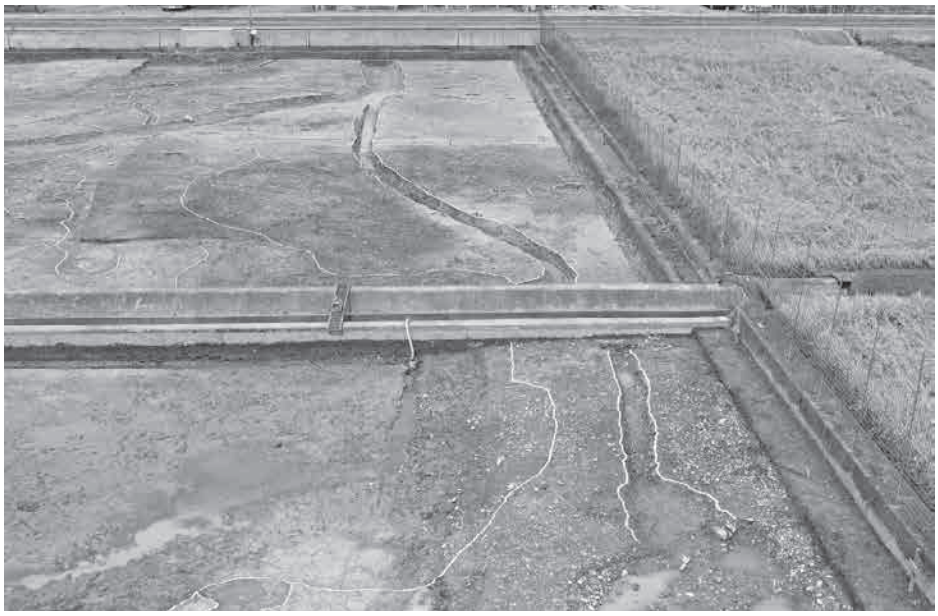
2．14 区遺構 100 セクション 1 土層堆積状況（南から）

3．14 区遺構 110 土層堆積状況（北西から）

4．14 区遺構 138 土層堆積状況（南東から）

1．14 区北側全景
（南上空から）

2．14 区北側全景
（上空から）



3．14 区北端
（遺構 46・62）
（東から）

上
1．14 区遺構 101 遺物出土状況（北西から）
中
2．14 区遺構 101 遺物出土状況（西から）
下
3．14 区遺構 101 石鏃出土状況（俯瞰）

右上
4．14 区遺構 101 土層堆積状況（南から）
左下
5．14 区遺構 101 内出土遺物（写真 1 のアップ）
右下
6．14 区遺構 101 土層堆積状況（西から）

1．14 区建物 1 全景
（南から）

2．14 区建物 1 全景
（北から）

上
3．14 区建物 1 遺構 120 断割状況（北から）
右上
4．14 区建物 1 遺構 121 断割状況（南から）
右下
5．14 区建物 1 遺構 123 断割状況（南から）

1．14 区西壁土層堆積状況
（北から）

2．14 区東壁土層堆積状況
（北から）

3．14 区北壁（遺構 120 付近）
土層堆積状況（南から）

4．14 区北壁（現有水路から東）
土層堆積状況（南西から）

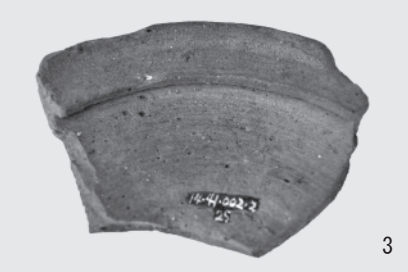
1．14 区下層確認 A トレンチ
（現有水路より西側）
（南西から）

2．14 区下層確認 A トレンチ
（現有水路より東側）
（南東から）

3．14 区下層確認トレンチ２
（北西から）

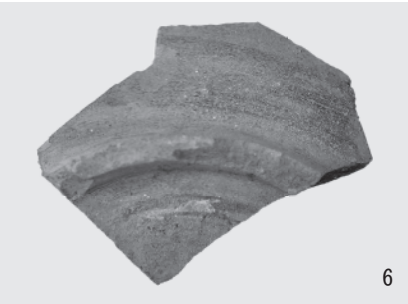
1

2


3

4

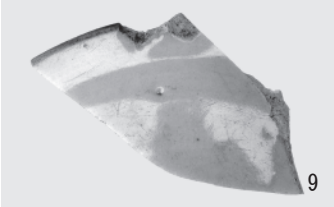
5


6

8

7

10


9

12

11

15

14

13

16

出土遺物（土器）

17

18

24

28

19

22

26

29

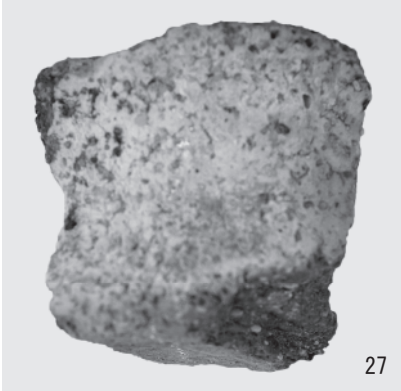
30

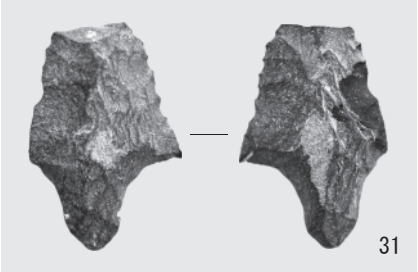
20

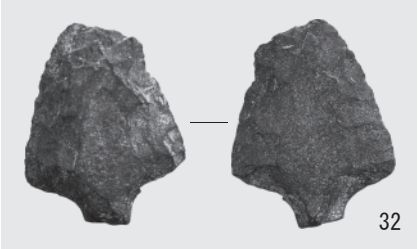
21

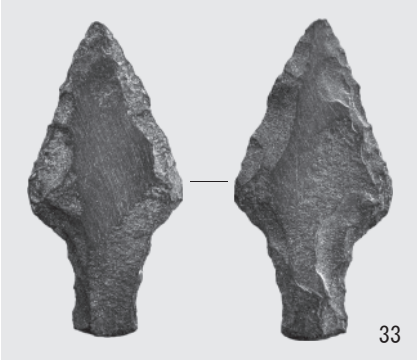
23

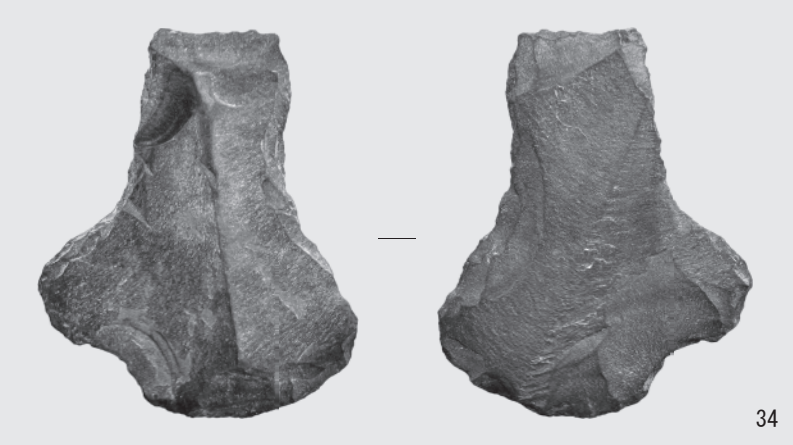
25

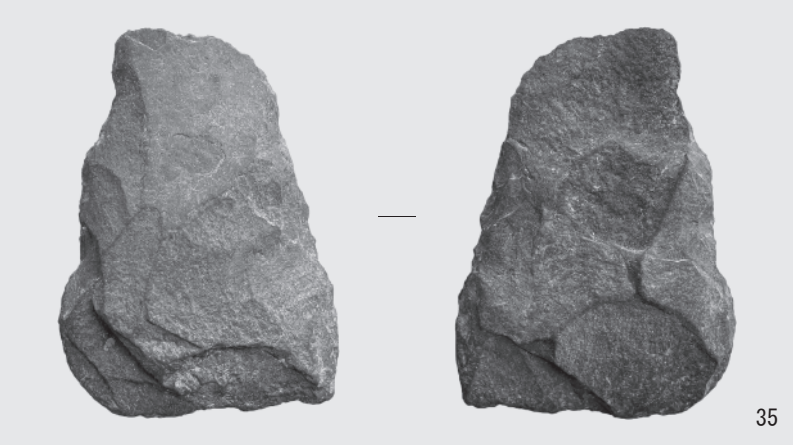

27

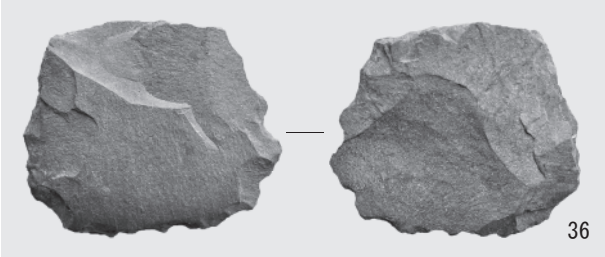

31

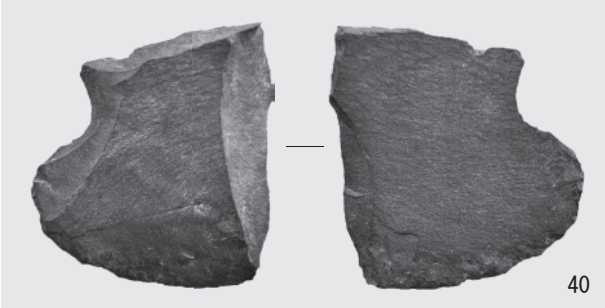

32


33


34

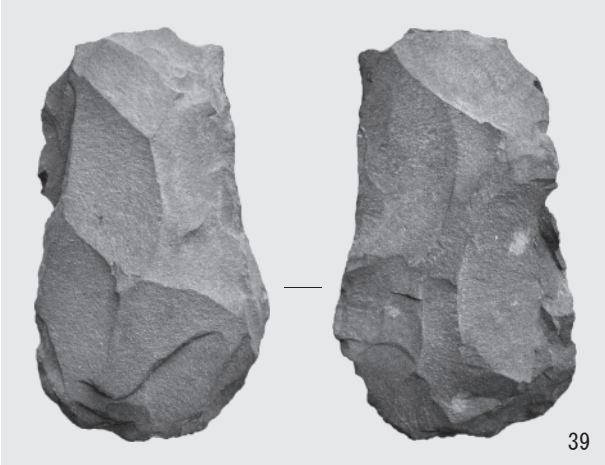

35

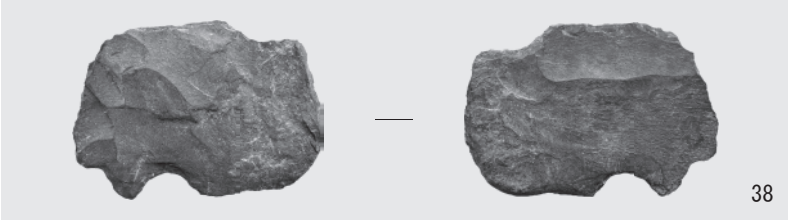

36

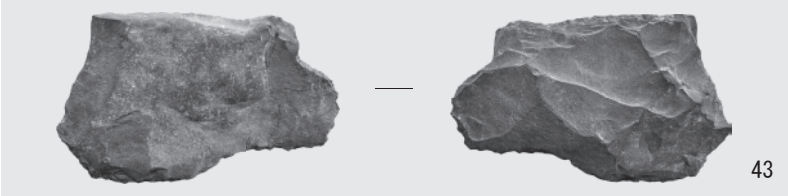

40

41

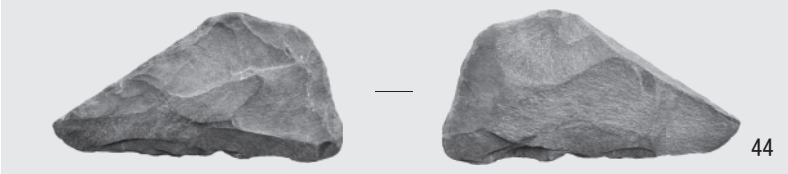
37


39


38


43

42


44

45

46

48

47

49

50

52

51

出土遺物（石器）

報告書抄録

ふりがな	たちのいせき
書名	立野遺跡
副書名	すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書
編著者名	佐伯和也
編集機関	公益財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8301　　和歌山市岩橋1263番地の1　　TEL　073-472-3710
発行年月日	2015年1月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
立野遺跡（たちのいせき）	和歌山県（わかやまけん）西牟婁郡（にしむろぐん）すさみ町（ちょう）周参見（すさみ）	30406	002	33°33′22″	135°30′38″	20140411～20140916	6,079	すさみ町公共施設移転

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立野遺跡	散布地	弥生時代	溝状遺構 土坑状遺構 自然流路	弥生土器 打製石器	特になし
		古墳時代	掘立柱建物・土坑	須恵器	

要約	すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査として6,079㎡を調査した。調査地の地形は北から南に低くなり、谷状地形の最も低い箇所に当たる。調査地の殆どの範囲において、弥生時代から中世にかかる時期の自然流路あるいは湿地状の遺構を検出した。 また、北側の高処では、明瞭な溝や土坑といったような遺構を検出した。出土遺物には弥生時代前期の土器に混じり搬入品も微量であるが確認できた。 今回の調査では、住居址の遺構は検出されなかったが、居住域は、調査地周辺の西側の微高地と考えられ、今後の調査に期待がもたれる。

立野遺跡

―すさみ町公共施設移転事業に伴う発掘調査報告書―

2015年1月

編集・発行　公益財団法人　和歌山県文化財センター

印刷・製本　株式会社　協　和